

Ⅲ 文様学的考察

はじめに

アル・タールの出土遺物は、メソポタミアではこれまで同一遺跡からこれほど多量に染織品が発見された例がなくまた諸要素が含まれており、染織史のみならず文化交流史の上からも極めて重要な資料である。

他地域の出土染織品とくにシリアのパルミラ¹⁾、ドゥラ・エウロポス²⁾、ゼノビア³⁾、東トルキスタンのローラン等⁴⁾の出土染織品とは染織文様及び技術において関連が窺われ、これらについてはすでに詳細な報告書があり、アル・タールの出土品との比較検討が課題とされる。またアル・タールの染織品の文様モチーフや図像表現は、西アジアの彫刻や壁画に表わされた衣服表現、モザイクを中心とする建築装飾等に類例が見い出され、これらの分野を含めて考察する必要がある。

ここではアル・タール出土の織物の装飾文様について主要なものをとり上げ、人物文様、植物文様、幾何学文様に分けて解説したい。ここに記述したもの以外の小断片にも材質、技術、文様様式が記述したものと同一と言えるものがあり、それらはおそらくもとは同一織物に属していたと思われる。復元は現時点では困難であるが今後試みる必要があろう。

アル・タールの出土品の染織文様については、これまで代表的遺物に関して報告書、論文、講演等において概要、問題点の提起、図像解釈の試みがすでになされてきた⁵⁾。ここではそれらの成果をふまえてより詳細に具体的に比較資料を挙げて再検討したい。

Ⅲ－1 人物文様

人物文の織物断片は全部で8点出土した。いずれも綴織りで矩形のなかに人物胸像を表わしたものと及びその断片で、この矩形は金茶色の薄手の良質な羊毛製平織地にワッペン風に糸で縫いつけられている。矩形の大きさは完存するものの大きい方で縦8.2cm、横7.5cm (No.214)、小さい方で縦7.2cm、横5.3cm (No.189)である。矩形の外縁帯飾りには鋸歯文及び凸字状文を並べたものと波頭文を並べたものがある。

(1) 鋸歯文及び凸字状文外縁帯のグループ

No. 189 矩形の額縁状の外縁帯の中左右には赤色の鋸歯文があり、その上下には凸字状文が表わされている。そしてそれぞれの底辺は外側にある。この外縁帯のすぐ内側には赤色の矩形細帯がめぐらされている。この二重の縁飾りに囲まれて、人物胸像が表わされている。頭飾りは上部に二つの球型があり、それらの下部にそれぞれ葉型文がある。球型は赤い線で表わされ、中央に緑の球型が置かれている。葉型文は緑色で中央に筋が入る。この頭飾りの下の額部には両縁が緑で中央に赤線が入ったバンドをしている。顔の両側の中央には赤色部分があり、その上下に緑のギザギザした葡萄葉状のものが置かれている。首の両側から肩にかけて緑色のリボン状のものがあり、横に3～4本の線が入っている。髪は顔の両側に沿って垂れ、左頬に巻き毛がかかっている。顔はやや右向き（人物自体の意で、向ってではない。以下同じ）なので顔の左側が広く、ふくよかで円型に近いたまご型をしている。眼球が右によってやや上方に視線が向けられている。太い弓形の眉と大きな眼球で、鼻は赤と褐色の線で明確に表わされている。赤い厚い口の中央に緑の線が入っている。特に目の表現が表情を生き生きとさせており、若々しい顔である。あごも豊満で首が太い。肩から下

の衣服の型ははっきりしないが、首のまわりを少しあけ、襟ぐりに青い線が二本入る。

No. 187 No. 189と目や口の配色や形が類似する人物文断片で、顔の右部分とその周囲の縁飾りのみ残る。縁飾りはNo.189と同一形式である。人物は右眼球の位置からやや右方を向いていたことがわかる。頭飾りは頭上と脇に赤と緑の円型を交互に並べ、額には緑のバンドを巻いている。

No. 191 胸像の左端部分とその外側の縁飾り（鋸歯文）断片。

No. 186 胸像の胸部と外縁帯（右側の鋸歯文及び下側の凸字状文）断片。

(2) 波頭文外縁帯のグループ

No. 173 頭部と右肩及びその外周部が残る断片である。顔は斜め左を向いている。外周部は、細い褐色の帯状の縁飾りの内側に、同じ色の波頭文が波頭を内側左方向に向けて間隔を空けて連続している。人物の頭飾りは上部に緑のかぶり物があり、顔の両側は上から赤、緑、赤、緑と色を違えた飾りが重なるように並んでいる。髪型は顔の両側から肩にかけて長く垂している。額がせまく、眉と目の間隔もほとんどない。口元や鼻の下部分は糸が抜けてしまったためかはっきりしない。右肩部分は無地で衣服か人体かはっきりしない。他の人物像に較べると、立体感がなく平板な顔付きをしている。

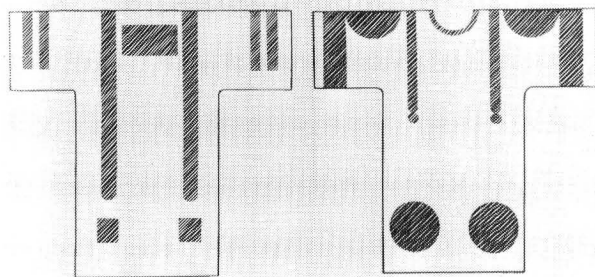
No. 214 矩形がほぼ完存し、No.173と同じく外周部は波頭文である。胸像は下端が水平線で切られている。顔は右向きで、頭部は黒と濃灰色を交互に並べ、頭上に金色に近い黄茶色の平たい王冠風の頭飾りをつけている。耳には球をつるしたイヤリングを付けている。ピンクの濃淡の口元、黒と青で縁取られた目、茶色の眉と鼻で鼻筋にピンクのアクセントが入り、目鼻立ちのはっきりした華やかな顔立である。ピンク色の衣服を身につけている。色が実に鮮明に残り、織り方もしっかりしており魅力的な顔の表情を見せており、No.173よりも華やかな印象を与える。

No. 207 波頭文で囲まれた左向きの胸像で、顔立ちや、イヤリングの装飾、色の系統はNo.214と同じである。大きな帽子をかぶる。帽子は内部が三角形で区画され、区画のなかに小矩形が数個ずつ置かれている。

No. 175 縁飾りの波頭文の地の部分、黒と青色部分がわずかに見える断片でおそらく、人物の頭部の周辺が残ったものと思われる。

人物文の図像的意味と用途 人物文の出土場所は、(1)のグループのNo.189, No.187, No.191, No.186が同一場所でA丘F 6洞窟第一室で、(2)のグループのうちNo.173はA丘F 3洞窟第一室、No.207とNo.214はC丘第16洞窟より出土した。F 6洞窟の第一室は皮製品と蘭草様のゴザの上に厚地のパイル織りを敷いた上に人骨が置かれ、人骨はNo.188の葡萄唐草文装飾の綴織りのついた薄い布をまとっていたと見られる。この綴織りと共に人物文綴織りが発見されており、おそらく死者を包んだものの一部であったと考えられる。

平織物に綴織り矩形装飾を縫いつける作例は、エジプトのコプトの織物に多数みられる⁶⁾（図Ⅲ-1）。それらはチュニクの装飾として使われたものである。コプトのチュニクはローマの伝統を受け継いだもので、装飾には両肩から裾にかけて垂直の紫色の線条文が置かれるものと、線条文の他に裾や両肩に円形や矩形の装飾が付くものがある。年代的には前者が先行する。人物や神像の円型または矩形の装飾の作例のものも残されている。アル・タールの人物文の様式に近いグレコ・ローマン様式を示すものは3～4世紀の出土品に見られ、立体表現にとみ自然主義的手法で表わされている⁷⁾（図Ⅲ-2）。アル・タールの人物文矩形綴織りはチュニクの装飾であったことも十分考えられる。但しエジプトの綴織物の経糸には主として麻が使われている。また西アジアのパル



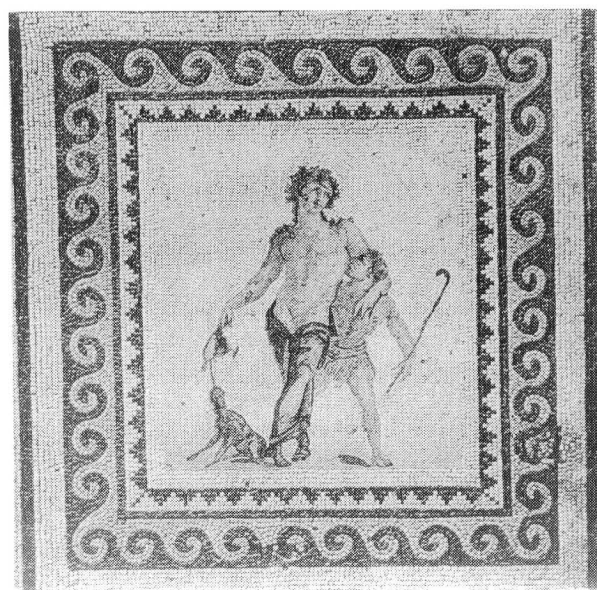
図Ⅲ-1 コプトのチュニック装飾部分



図Ⅲ-2 ナイル河の擬人像織物、コプト



図Ⅲ-3 人物胸像モザイク、アンティオキア



図Ⅲ-4 鋸歯文と波頭文縁飾りモザイク、アンティオキア



図Ⅲ-5 女性小像、バビロニア地方



図Ⅲ-6 ディオニッスス像モザイク、
アンティオキア



図Ⅲ-7 ディオニッスス像織物、コプト



図Ⅲ-8 頭部モザイク、ビシャーブール

ミラやゼノビアなどから出土しているチュニクも装飾部分の緯糸を除き麻である。アル・タールの人物文とそれが縫い付けられた基布も毛織物なので材質的には相違する。一般にコプトの織物で矩形や円形内に表わされた人物胸像は、古代ギリシア・ローマの神像や英雄、死者の肖像を表わしたものとされているが、装飾物や持物から人物を比定するのが難しい場合が多い。⁸⁾これらのコプトやアル・タールの織物に見られる人物文が、グレコ・ローマン文化を背景に出現したことは間違いないであろう。

矩形人物胸像文は織物ばかりでなくモザイクにも見られる。例えばシリアのアンティオキアの舗床モザイクには、矩形ないし円形の枠組の中に多くの人物胸像が表わされている⁹⁾(図Ⅲ-3)。頭部は斜めを向いた姿勢をとるが、その角度は様々でアル・タールの如く一定ではない。頭飾りには果実や花葉が多く用いられている。モザイクの縁飾りには鋸歯文、波頭文がしばしば使われ、それらが同時に用いられている場合もある(図Ⅲ-4)。人物は古代ギリシア・ローマの神像、擬人像などで、文学的な題材が住宅の床面を装飾し生活に彩りを与えたものと思われる。モザイクではこれらの題材を表わすのに胸像ばかりでなく、全身像や数人の登場する場面も多い。これに対し、アル・タールでは単なる装飾としてでなく、衣服に付けられた守護神または護符的役割をもつものとして、胸像に限定されパターン化したものと想像される。

メソポタミア南部からはテラコッタや大理石の女性小像が多数出土しており(図Ⅲ-5)、それらはグレコ・オリエント様式を示すヘレニズム期のもので用途は神殿の奉納品とも護符とも言われている。人物文綴織りも同じような土壌から生まれたものと思われる。

一見したところアル・タールの人物文は優雅な顔付きをしており女性像と思われるが、No.189は頭飾りにギザギザした葡萄葉状のものと赤い実が見え、ディオニッソスとも考えられるのである。アンティオキアのモザイクやコプトの織物などに表わされたディオニッソス像(図Ⅲ-6・7)と比較すると、髪の下部から肩にかけてリボン状のものが表わされているのも共通する。ただしアル・タールの頭上の二つの大きな果実状の球型とその下の葉形は類例がない。一方エジプトの3～4世紀頃のグレコ・ローマン様式の綴織物に表わされた神像は頭上に太陽や果実の大きな象徴物を載っている(図Ⅲ-3)。おそらくNo.189の頭上の飾りもこうした神像の象徴物の一つと思われる。

グレコ・ローマン文化圏では神像が果実や花葉の冠を載っている例は多く、ビシャーブールのモザイク(3世紀後半)では花冠を作っている場面が表わされており、花冠で飾るのは神像ばかりでなく日常生活でも流行したものと思われる¹⁰⁾(図Ⅲ-8)。No.187はこうした花冠なのか帽子などの被りものか判然としない。一方モザイクや彫像などに見られるように華やかな帽子型の被りものもあり¹¹⁾(図Ⅲ-5・9)、No.173やNo.207はそうした帽子をかぶる女性像であろう。これらの当時の服装の流行を反映した風俗的要素の強い女性像が、女神像なのか単なる女性像なのか明確でない。いずれにせよそれらを身に着ける者にとって、マスコット的な存在であったと思われる。

人物文の表現様式 鋸歯文及び凸字状文外縁帯をもつ(1)のグループでは、人物の縦方向と綴織りの経糸方向と一致する。波頭文外縁帯をもつ(2)のグループでは、人物の縦方向と綴織りの緯糸方向とが一致する。全体の表現は、(1)のグループのNo.189とNo.187は類似するがNo.189がより秀れた出来ばえを示し、(2)のグループではNo.214とNo.207には共通する点が多く、No.173はそれとは系統を異にする。

No.189は斜め横に向けられた大きな目、ふっくらした頬、太く長い首の顔立ちが陰影や立体感豊かに表現され、



図Ⅲ-9 女性頭部織物、コプト



図Ⅲ-10 女性像壁画、ミーラン



図Ⅲ-11 ヘルメス像織物、ローラン



図Ⅲ-12 女性像モザイク、ビシャープール

鼻筋や口元に鮮やかなアクセント・カラーを配した生氣あふれる胸像で、アンティオキアのモザイクやコプトの織物に見られるグレコ・ローマン様式の表現と共通する。左の頬から首にかけて流し織りを駆使し面を細かく分けて色をかえており、これが実にボリュームにとむ人物のモデリングとなっている。こうした流し織りはグレコ・ローマン様式のモザイクで人物像を表わす際の石の並べ方と非常に近い（図Ⅲ-6）。人物の縦方向に経糸を置くやり方が、これらの効果を生みだす一要素となっているのかもしれない。また中央アジアに伝播したグレコ・ローマン様式の人物像の表現とも類似する。例えばやや斜め上方を見つめる表情は、ミーラン出土の壁画の少女像に見られるものである（図Ⅲ-10）。No.187はNo.189と同じような色使いとふくよかな顔立ちで同系統の横式を示しているが、織糸がより太く織目が荒く顔の表情も精彩に乏しい。

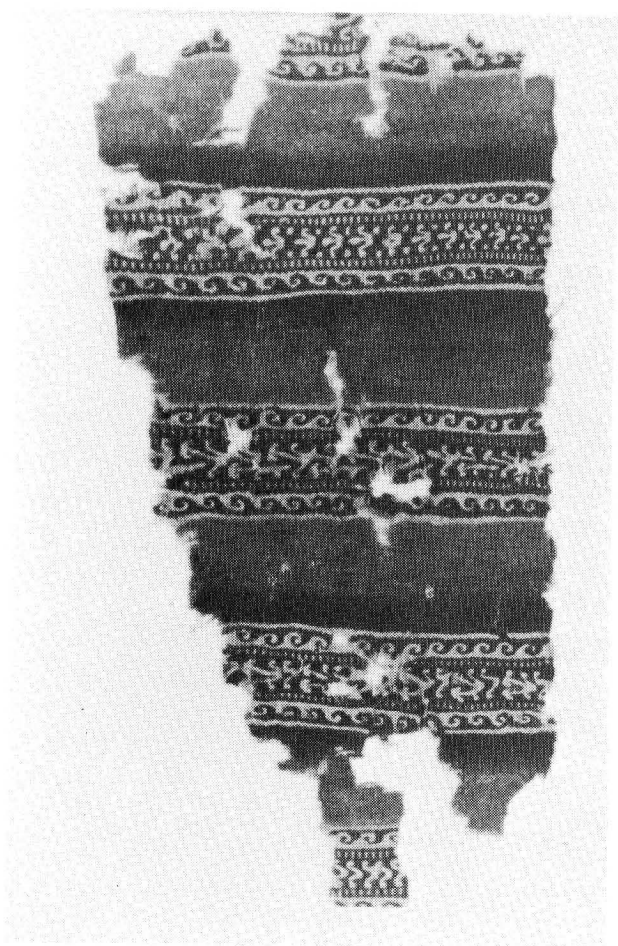
No.207とNo.214は一際目が大きく目尻が尖っている。顔形はやや細長く、首はより太く長い。紅色や濃い肌色でアクセントや暈しをつけているが流し織りはあまり使われておらず、No.189よりも立体感に乏しく、グレコ・ローマン様式がやや薄れていると考えられる。これに関連するものとして、ローランからは「ヘルメス像」と呼ばれる大きな目の陰影にとむ人物像の毛の綴織り（図Ⅲ-11）¹²⁾が出土している。

No.173は口元の部分が欠けており顔立ちが判然としないが、細面で額が狭く、目と眉がつき、首が短かく地味な顔付きで、口元には細糸で流し織りがなされているが立体効果が生みだされず平板である。こうした人物表現は、西アジアの土着的の要素を示しているとも考えられる。例えばビシャープール出土の床モザイクの人物表現（3世紀後半）¹³⁾などに見られる地方的性格が強く反映しているのではなかろうか（図Ⅲ-12）。

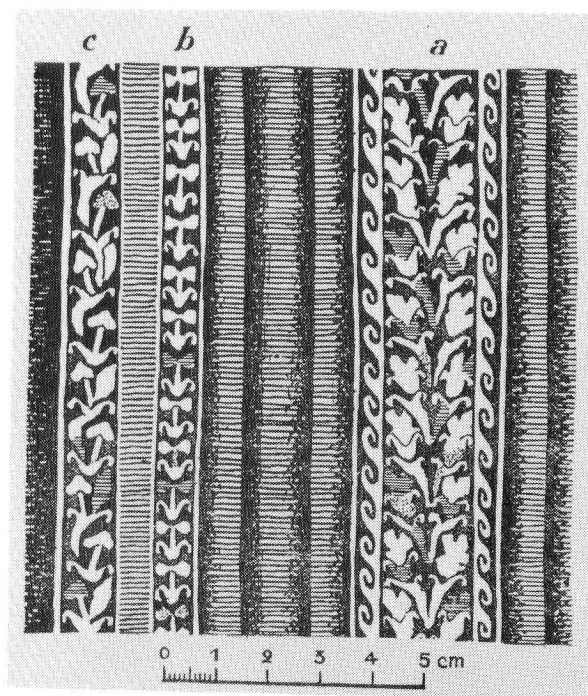
以上人物文には、グレコ・ローマン様式を示すものと、それらの影響を受けながらも西アジア的要素が反映しているものがあり、それらはおそらく輸入品と地元で製作されたものとに区別されるであろう。しかしそれと年代的差異とを関連づけることは現段階では困難である。

Ⅲ-2 植物文様

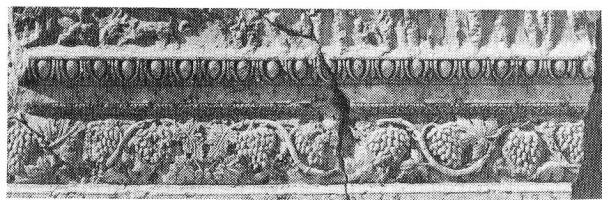
No.188の葡萄唐草文綴織りは、No.189の人物文綴織りを包みこむような形で同一場所で出土した。文様は帯状に構成され、唐草文帯、暈し帯、縁飾りの波頭文帯が交互に置かれている。このような波頭文の縁飾りの形式の織物文様は、ドゥラ・エウロポスのNo.128（図Ⅲ-13）やパルミラのL.126（図Ⅲ-14）に見られるもので、それらは波頭文の内側に様式化した植物文が連続し、外側には暈し帯を伴っている。No.188の唐草文（No.188部分図）は、中央に波頭文帯に対し平行な細帯があり、その両側に三つのモチーフが見られる。蕨手状のモチーフ、菱形を石だたみ風に六個ならべたものと両側に二つずつ突起部のあるモチーフで、一部は中央細帯と連結している。これらのモチーフは葡萄の巻きひげと実と葉で蔓を表わす中央細帯から派生しているものである。尖頭型葡萄は西アジアに見られるもので、パルミラのパール神殿の建築装飾浮彫にはこの種類の華麗な葡萄唐草文が表わされている（図Ⅲ-15）。また葡萄唐草文は一般に蔓が流動的な波状曲線で表わされるのが多いが、アル・タールのように直線でその両側に実や葉を派生させる形式の例もパルミラの浮彫に存在する（図Ⅲ-16）。アル・タールの葡萄唐草文は角ばっており幾何学図形に近い印象を与える表現がなされている。東地中海沿岸地域の葡萄唐草は流麗な曲線の蔓をもち、写実的表現が見られるのが多いのに対し、アル・タールの例はあまり例のない様式である。いわゆるグレコ・ローマン様式の正統的表現を受けつぐものでなく、幾何学的な形で簡略化がなされ地方色を示しているのかもしれない。No.188の他の部分には葡萄の葉と蔓だけの唐草文帯状装飾も見られる。なおNo.188の資料の全体の復元が試みられている。



図Ⅲ—13 波頭文縁飾り、ドゥラ・エウロポス



図Ⅲ—14 波頭文縁飾り、パルミラ



図Ⅲ—15 葡萄唐草文浮彫、パルミラ



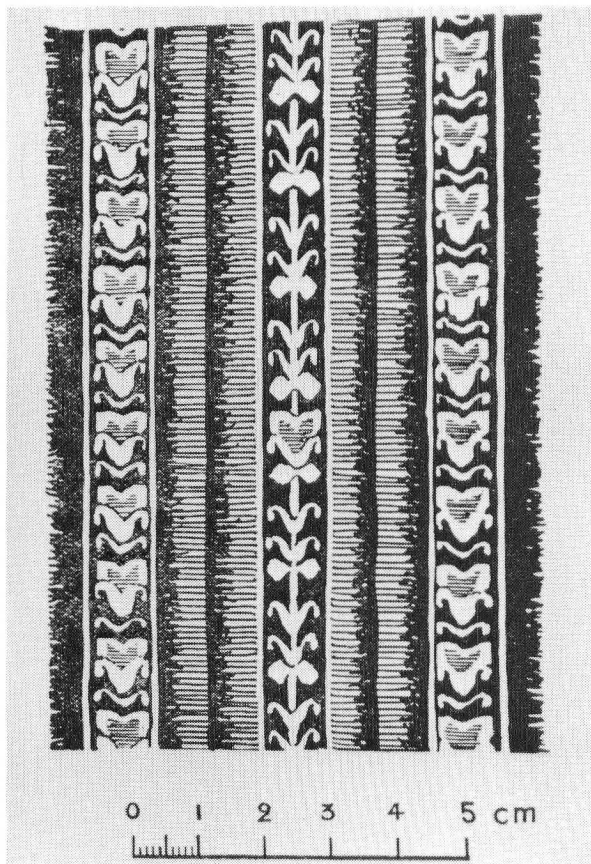
図Ⅲ—16 葡萄唐草文浮彫、パルミラ



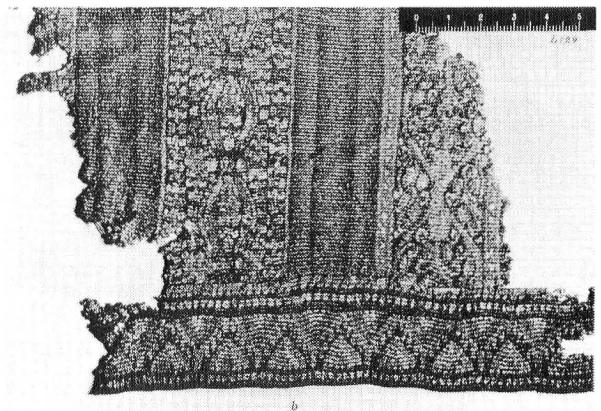
図Ⅲ-17 人物像浮彫、パルミラ



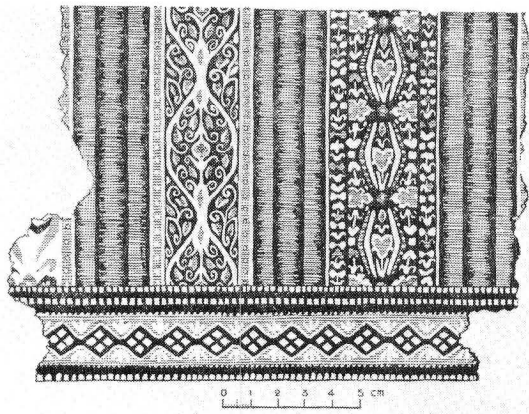
図Ⅲ-18 人物像、ハトラ



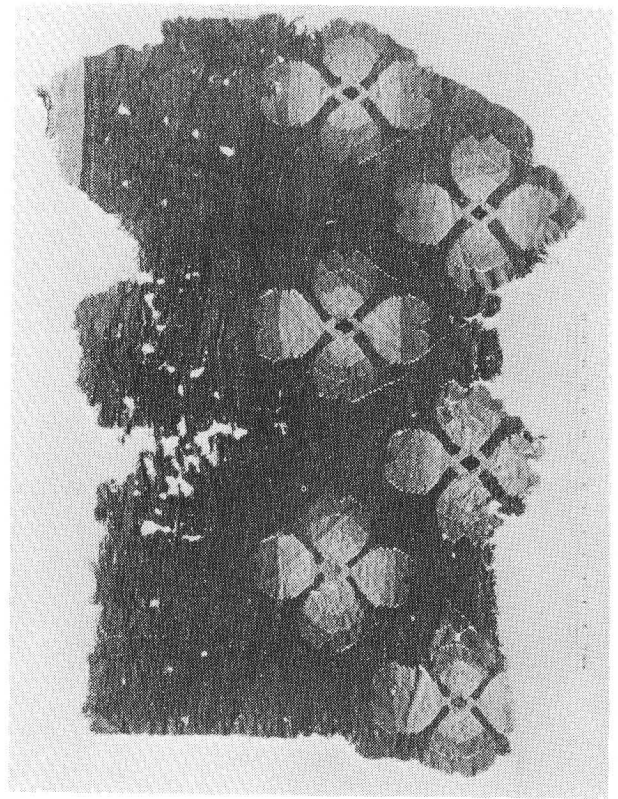
図Ⅲ-19 帯状装飾、パルミラ



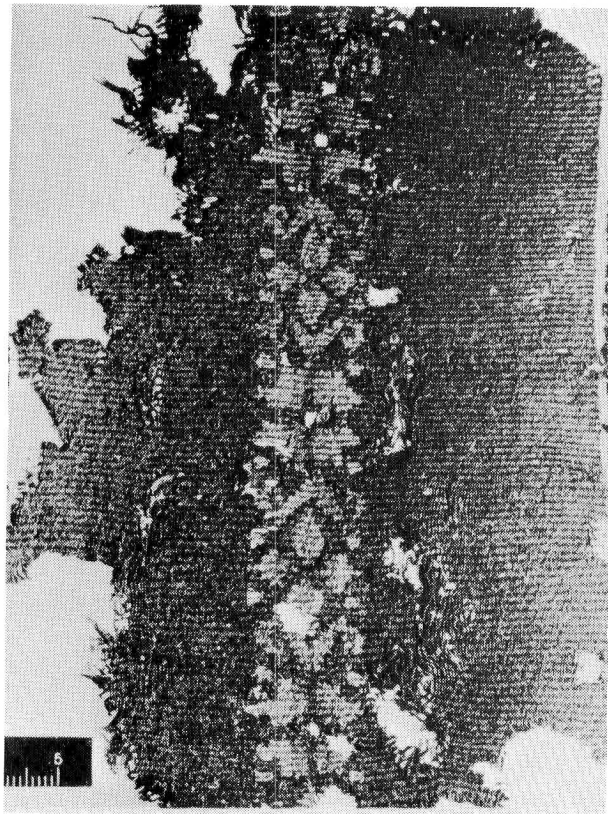
図Ⅲ-20 植物文装飾、パルミラ



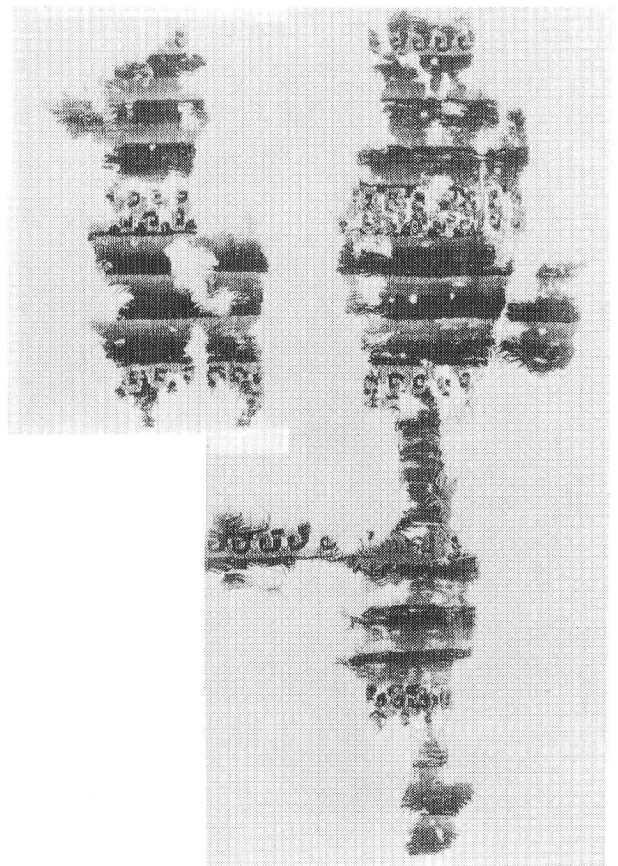
図Ⅲ-21 植物文装飾、パルミラ



図Ⅲ-22 ハート形花文、ドゥラ・エウロポス



図Ⅲ-23 植物文装飾、パルミラ



図Ⅲ-24 波頭文と暈し帯縞文、ドゥラ・エウロポス

帯状文様で衣服を装飾する例は、パルミラやハトラの彫刻に多く見られ（図Ⅲ-17・18）、パルティア時代の典型的な服装文様である。彫刻に見られる膝丈のチュニックとズボンを組合わせた男子用の衣服では、帯状装飾はチュニックに縦に一条又は二条、及び裾飾り、ズボンの中央部分などに一条使われている。それらの帯状装飾の外縁部には小連珠文が置かれ、波頭文を使っている例は見あたらないが、実際に出土した帯状装飾の織物の用途にはこうした衣服と関連があろう。

これらのパルティアの彫刻の帯状装飾には唐草葡萄をはじめ豪華で精細な植物文が多く見られ、それらは発達した染織文化の所産であることを示している。これに対しアル・タールの作例はそれらのヘレニズム都市の周辺に位置する土着的、地方的文化から生まれたものであろうかと思われる。

No.211 は褐色地に薄茶色の文様の地味な配色で、植物文様を表わした綴織りである。垂直の幹から両側に延びる枝に葉が付く。幹を中心軸に対称形をなす、細く長く続く樹木文である。この樹木の列は、6 cmほど空けて二列ある。そのすぐ外側にモチーフらしきものが続き、その他同断片の一部と思われる波頭文の部分が残されている。おそらく波頭文の縁飾りの付く帯状装飾文帯であったと思われる。

波頭文で囲まれた植物文の帯状装飾文帯は前述のパルミラ出土のもの（L.126 図Ⅲ-14）やドゥラ・エウロポス出土のもの（No.128 図Ⅲ-13）などがあるが、それらは植物文がより様式化され繁雑な形態をなし、配色も暈し帯と組合わせ多彩であった。アル・タールの No.211 は配色も文様も極めて簡素ですっきりしている。

直径1 cmほどの白に近い薄茶色の小開花文のモチーフがNo.170, No.193, No.195に見られる。No.170は赤紫地の縞柄で、縞の中に小開花文が置かれている。橙を中心に緑、薄茶、橙と両側に並べられた縞の中に杏仁形の橙色に囲まれて八弁花文があり、中央部は朱色でアクセントを付けている。また数cm隔てて縞があり、中に小さな薄茶色のモチーフがあったらしい。こうした縞柄中の開花文の例は珍しい。No.195も細幅の帯状部分に小開花文を置き、その左右に流し織りで三角状の線が延びて次の薄茶色のモチーフと連絡している。このモチーフが何であるかは判らない。No.193は六弁花文で中央には地色と同じ青緑色が置かれている。細帯の装飾帯に植物モチーフを置く例はパルミラの出土品（L.126 図Ⅲ-14, L.127 図Ⅲ-19）などにあるが、それは様式化した側花文の連続である。また植物文の周囲を杏仁形で囲む例もパルミラにあるが（L.124 図Ⅲ-20, L.125 図Ⅲ-21）それらは密集した複雑な植物文である。ドゥラ・エウロポスからハート形四弁花文の綴織り（No.140, 図Ⅲ-22）が発見されているが、それらは直径6 cmもある花文で、しかも規則正しく互の目配置がなされている。パルミラのL.121（図Ⅲ-23）には二種の開花文を交互に繰り返した帯状部分が見られ、この例が最も類似するものと思われる。

No.180はピンクと青緑の色の濃淡を使った鮮明な配色の綴織物である。同種の配色の断片はほかにもあり（No.179など）、同一織物であった可能性もある。モチーフには先の尖った突出部があるが、具体的に何であるか判然としない。他の断片には階段状の部分がある。コプトの織物にはよくピンクと緑を組合わせた配色で濃淡により立体表現された花葉の文様が見られる。No.180はピンクと緑が接しており地色の部分が見えず、植物文様か否かは判らない。しかしコプト系の織物と共通する配色と言えるであろう。

Ⅲ－3 幾何学文様

横縞文, 量し帯 緯糸に平行な横縞文の毛織物が多数出土しており, アル・タールの織物の代表的装飾文様の一つとなっている。横縞は平織りまたは畝織りにより, 緯糸の色を変えることによって簡単に織れる文様である。縞の種類として, 5 ミリ程の細幅のもの, 数センチ程のやや太幅のもの, 色の濃淡を使った量し帯などがあり, これらの要素を組合せて縞柄が構成される。

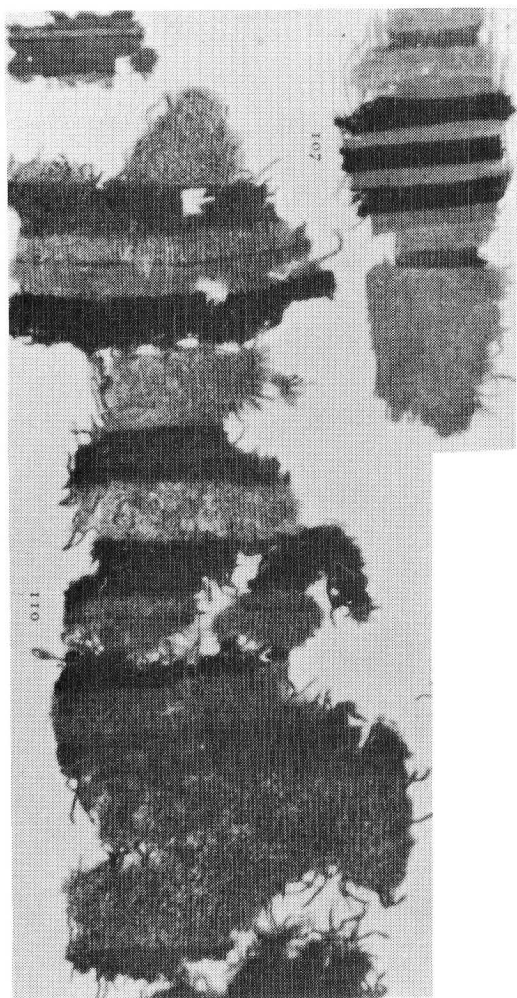
No.148 は二色の細幅を交互に数条ずつ並べ, 次々と色の組合せを変えている。色の配列, 縞の幅は一定でない。経糸一本に対して, 緯糸一本が打ち込まれる平織りの横筋と, 緯糸二本合せて打ち込まれる畝織りの横筋の部分とがある。¹⁴⁾ No.51は色は黄茶と褐色を交互に, 縞の幅は細幅二条の次に太幅一条を規則正しく並べている。No. 244 はパイル織りの部分に接続して, 暗赤色地と青色地の部分が続く, それぞれ約 3 cm程の間隔で細筋が三本ずつ 3 箇所に入っている。三本のうち中央の筋は色を違えている。No.196 は波頭文で縁取られた帯状部分に褐色系の量し縞が見られる。中心部から外側に向って淡から濃への量しが三度繰り返されている。この量し帯の部分は斜文織りになっている。No.75は黄茶地に, 赤色の細幅で縁取られた緑色の 4 cm程の太縞が見られる。

これらの横縞織物はいずれも小断片で, その用途や全体の文様構成は明らかでないが, 他地域からも同様のものは出土しておりそれらと比較してみよう。横縞織物は¹⁵⁾ ドウラ・エウロポス, ¹⁶⁾ パルミラ, ¹⁷⁾ ゼノビアなどから出土しているが, とくに種類が豊富なのはドウラ・エウロポスである。ドウラ・エウロポスの No.126 (図Ⅲ-24), No. 127 は量し帯と波頭文帯の縞で, アル・タールの No.196 に近い文様である。但し波頭文はアル・タールに見られない二段波頭文が一部に使われている。ドウラ・エウロポスの No.126 の配色もアル・タールの No.196 と共通している。ドウラ・エウロポス及びパルミラの量し帯文様には様式化した植物文様帯と並べたものが多数見られるが, アル・タールの量し帯には No.188 以外にこのような複雑なものが見当たらない。ドウラ・エウロポスの No.110 (図Ⅲ-25), No.166 は種々の色の縞で, アル・タールの No.148 と類似する。但し横筋の幅はドウラ・エウロポスの方が太く, 1.5 cm前後のものが多い。また, ドウラ・エウロポスのこれらの横縞の配色はシンメトリーに繰り返されている。アル・タールの横縞がシンメトリーか否かは断片が小さすぎて不明であるが, その復元にはドウラ・エウロポスの例は参考になるであろう。これらの縞・量し帯の配色や組合せ, 起源や出土の分布は十分検討すべき問題であろう。

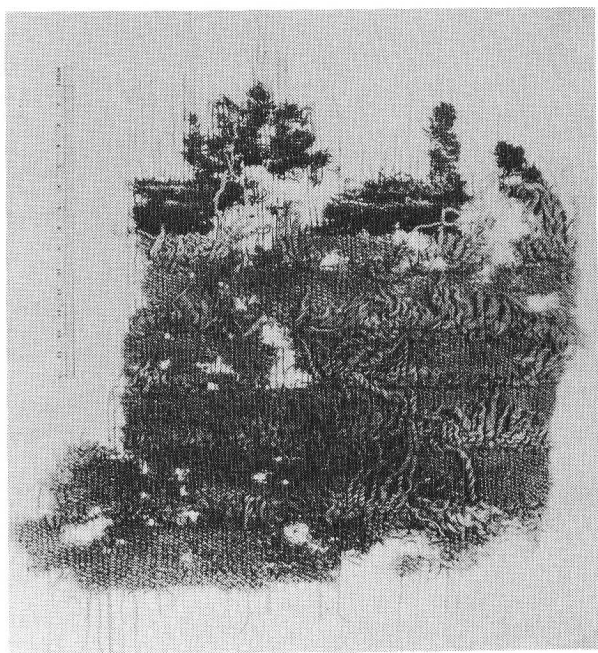
ドウラ・エウロポスとパルミラからは, 紫色の横縞文をもつ織物が多くあり, それらはチュニクのクラブ(首の両側の肩から裾にかけての帯状装飾)と考えられており, 一本, 二本, 三本線の例がある。¹⁸⁾ アル・タールの No. 4 は三本線で各幅 2 cm以上ある。

格子文 経・緯の色を変えることによって表わした格子文様の木綿織物 No. 8 は, 格子の幅は不規則である。パルミラからも格子柄の木綿織物 (T.69 図Ⅲ-26) が出土しているが規則正しい格子柄である。No.217 は綴織りの地の部分が格子柄になっている。この他青緑による大きめの矩形 (約 3 × 2 cm) の格子柄の織物 No.30 などが出土している。時代が下るゼノビアからは, 三本線と一本線を交互に配した格子柄, 四本線による格子柄の麻織物 (ゼノビアの No.62) があり, 幾何学的な線條のリズムの美をもつに至っている。

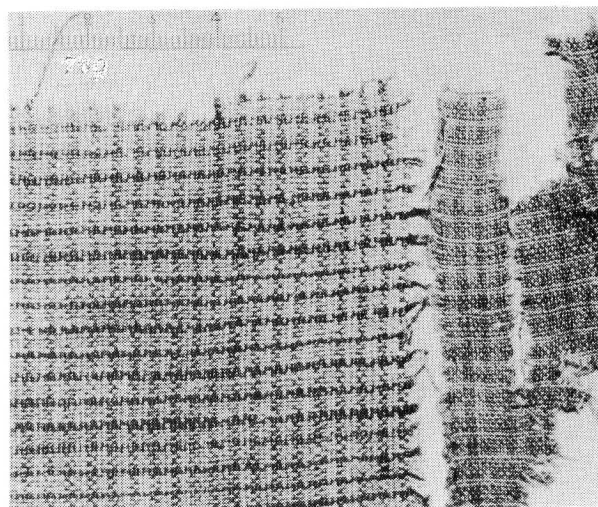
階段文 No.222 は薄茶色地に, 暗赤色の綴織りで階段状の文様を表わすパイル織物である。パイル織物の文様には, ドウラ・エウロポスから紫色 (No.228, No.229) や多色 (No.231 図Ⅲ-27, No.233) の横縞文が出土している。ドウラ・エウロポス出土の階段文 (No. 3, No.12, No.13, No.14) に, チュニクの紫色横縞文の中央部に三角状に



図Ⅲ-25 横縞文、ドゥラ・エウロボス



図Ⅲ-27 横縞文、ドゥラ・エウロボス



図Ⅲ-26 格子文、パルミラ (経糸方向は不明)



図Ⅲ-28 H型文、ドゥラ・エウロボス

表わしたものであるがアル・タールのパイル織りに較べると小型である。

H・L型文、矩形文 薄黄茶地に綴織りで紫色のH型文、L型文、矩形文などを織り出した一連の毛織物が出土している。同種のものはドゥラ・エウロポス、パルミラからも発見され、R.フィステルはドゥラ・エウロポスのユダヤ教会の壁画に表わされた服装から、それらはチュニクの上にはおるマント（巻き衣）の断片であると指摘した。¹⁹⁾

No.203 は織物の完形が推定できる非常に重要な出土品である。縦238.5cm、横164.0cmで両耳と両織端の一部が残り、織り上がった織物をそのまま裁断せずに使用している。そこに二種類の文様のモチーフが表わされている。一つは織耳に接し織端近くに三個の小矩形を並べそれらの間に細線を入れたもので、二箇所に残っている。縦のほぼ三等分線の位置に、緯糸方向に置かれた細長いH型文が三個見られる。No.178 はH型文と織耳に接する三矩形文が表わされており、No.203 と同形式の文様配置をなしていたと思われる。ただしH型文はNo.203 よりもより幅が広く、矩形の間に細線が入らず、装飾文の細部は異なる。

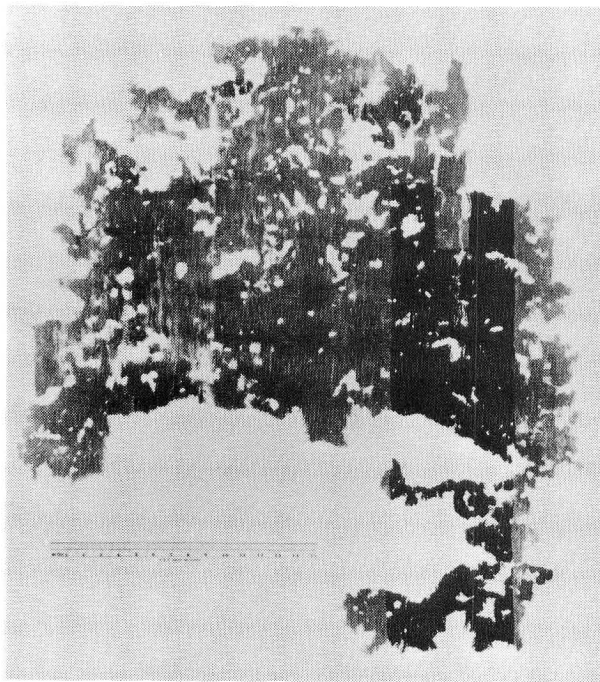
ドゥラ・エウロポスのユダヤ教会の壁画に表わされたマントの装飾文として、腕から垂した部分の織端近くにH型文の一部分又は三矩形文が対称形の位置に二箇所表わされている。また左肩、左下半身にも■型文が見られる場合がある（図Ⅲ-28）。これはH型かL型文の一部と思われる。パルミラやドゥラ・エウロポスからは、両者の織物断片も出土している（図Ⅲ-29, 30）。²⁰⁾ アル・タールのNo.208 は細長く小さなL型文の例である。

No.107 は織耳に接し細長い2個の矩形文があり、No.208 も同種の矩形文と思われ、これらは、マントの装飾文の一部をなしていたと推定される。²¹⁾ No.225 は厚地の両面パイルであるが、耳に接して幅5cmほどの矩形文らしきものが2箇所を表わされている。文様の一部が欠けているため確認できないが、マントの柄が敷物にも応用された例であろうか。

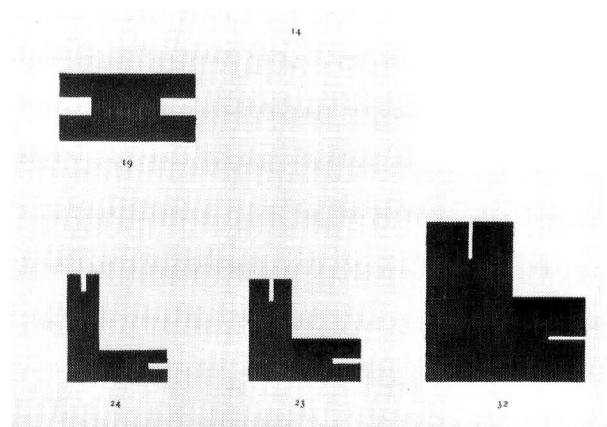
卍型文、卍型メアンダー文 No.208 は紫文中に縦、横1cmほどの地色の卍型文が表わされている。紫文の幾何学文にこのような文様モチーフを織り込むのは他に例が見当たらない。

卍型文について最近、国谷誠朗氏が従来の諸研究を概括した上で、グッドイナフの図像象徴論に多大に啓発され卍型文の深層的意味について試論を展開されている。²²⁾ それによれば卍型文は我が国では万字と呼び仏の胸前に表わされた吉相万徳の相として親しまれているが、欧米ではスワスティカ、ハーケンクロイツなどの名称があり、学術的にはガンマディオンと呼ばれてきた。卍型文は地域的にも歴史的にも極めて広範囲に用いられ、すでに前5000年のハッスーナ期（サマラ出土）の土器の文様に見られ、メソポタミア文化圏、地中海文化圏の古代遺跡に広く分布しており、さらに全世界的な規模でその跡をたどることができる。卍型文のもつ象徴的意味については古来からさまざまな解釈が与えられ、男女の結合、四文字の組合せ文字、水、火、天空の主神、太陽または太陽神等で、それらは特定の文化圏で特定の期間通用した解釈である。そこで国谷氏は卍型文の形態的側面を分析し、その根底に「生命の流れ」という深層的意味が常に存在することをつきとめ、卍型文に関する全ての象徴的意味もここから導き出されていると出張されている。さらにH・L型文も同じ祖型から発展したものであり、ともに永遠の生命や不滅を象徴するものであると述べている。

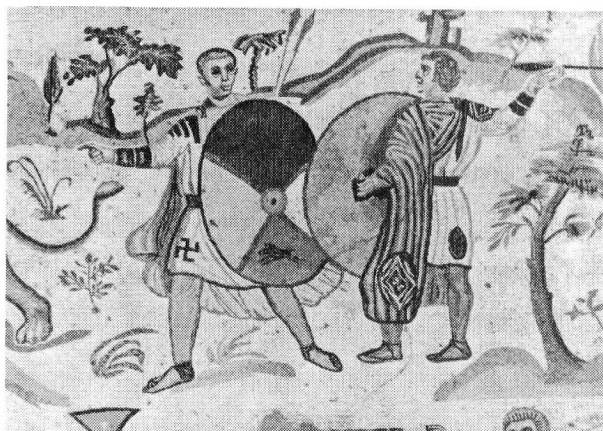
ローマ及びヘレニズム文化圏において、衣服装飾に表わされた卍型文はかなり例があげられる。太陽の神アポロの胸の中央に描かれた卍型文は太陽神を象徴するものであろうが、²⁴⁾ 大部分の例はチュニクの両肩、両裾にマークの様に表わされた卍型文である（図Ⅲ-31）。²⁵⁾ それらはH・L型文のように地に対して濃い色でアル・タールの卍型文よりも大きく表わされている。



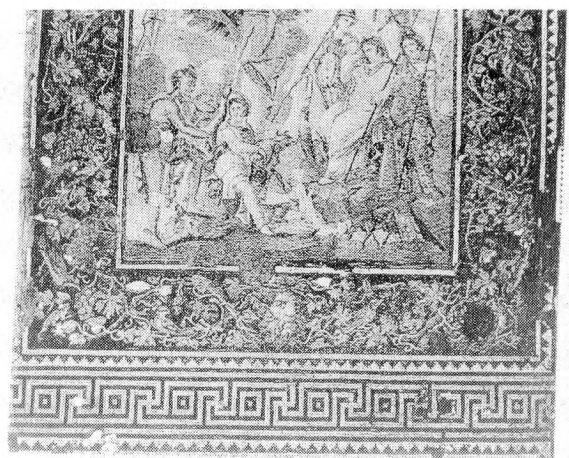
図Ⅲ-29 H型文、ドゥラ・エウロポス



図Ⅲ-30 H・L字型文、ドゥラ・エウロポス

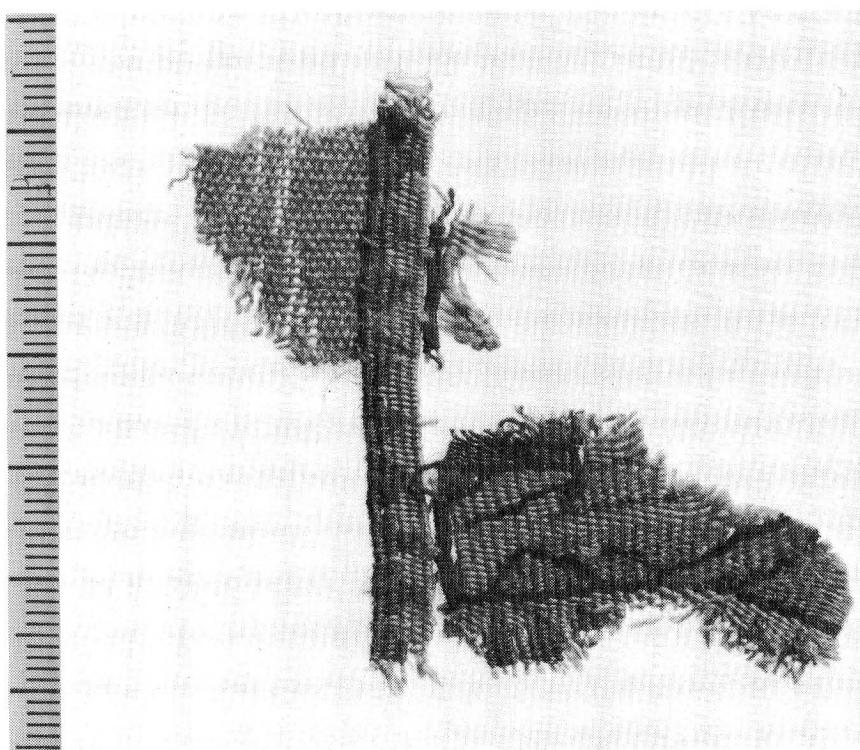


図Ⅲ-31 卍型文、ローマ

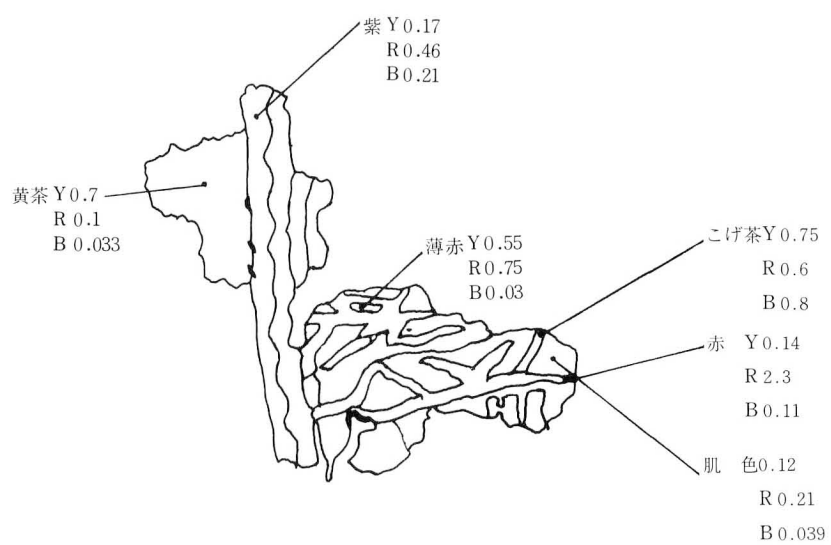


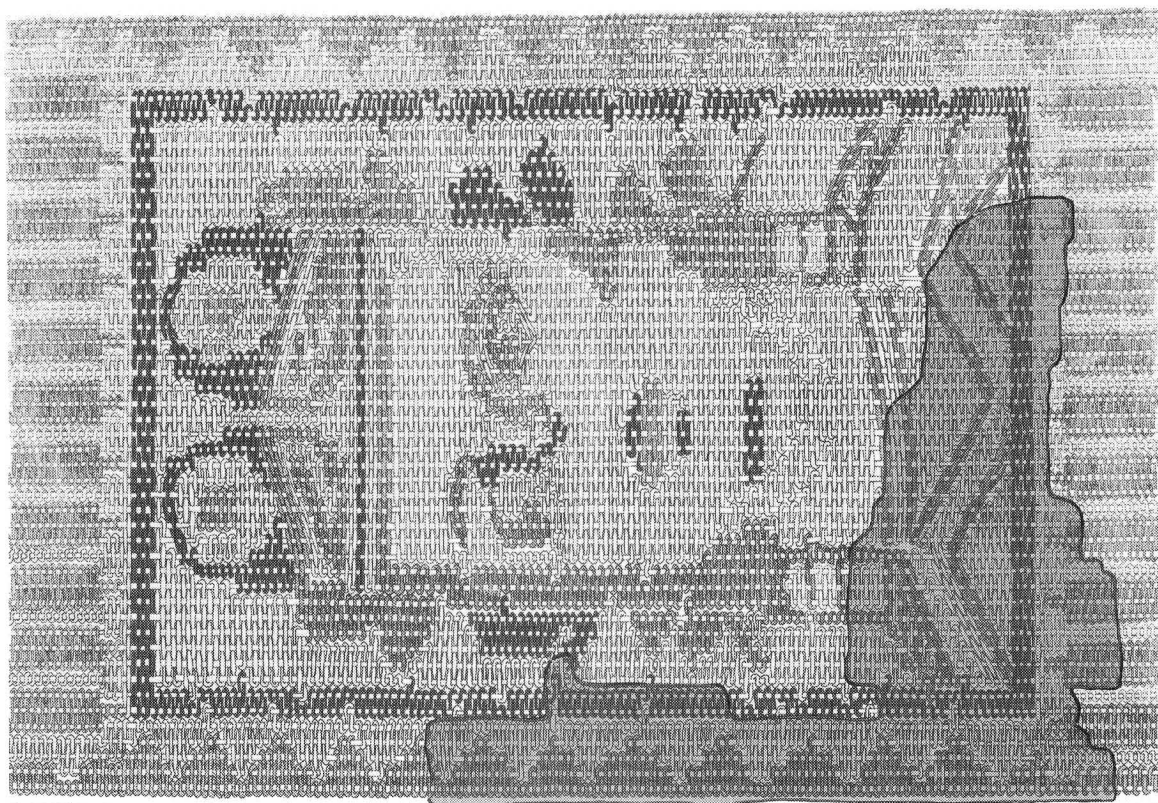
図Ⅲ-32 メアンダー文モザイク、アンティオキア

図Ⅳ—7 完成品写真, No.186

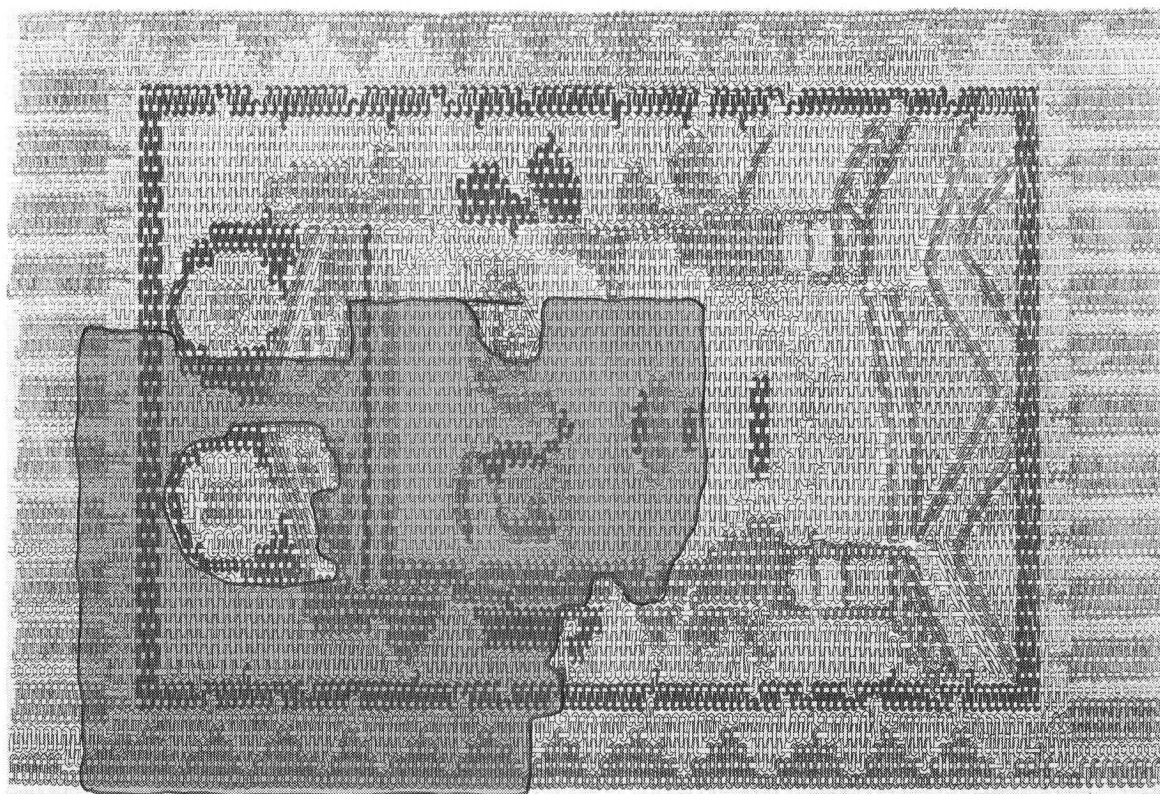


図Ⅳ—8 No.186





図IV—10 No.189とNo.186の比較



図IV—9 No.189とNo.187の比較

裂地比較表

データーは染織遺物集成による

番号	189	187	186
出土地	F 6, R 1, II-T	F 6, R 1, II-T	F 6, R 1, II T
採集番号	C-38-12-1-IV	C-38	C-14
織組織	綴	綴	綴
素材(経)	毛	毛	毛
(緯)	毛	毛	毛
撚(経)	S	S	S
(緯)	Z, S	Z, S	Z, S
糸の直経(経)	0.39	0.41	0.76 (nm)
(緯)	0.3	0.62, 0.42, 0.45, 0.49	0.32, 0.38, 0.56, 0.47, 0.55, 0.44
密度(経)	11	10	18
(緯)	17	34	10

4. 裂地No.173(C-78-1)(図IV-11, 12, 13)

今回の複製裂地の内人物像が3点あるが裂地No.189(C-38-12-1 IV), 裂地No.187(C-38)は縦織り(経糸方向に柄をかたちづくる)に対してこの裂地は横織り(緯糸と直角に柄を出す)になっている。

図柄及び色あいは大変コプトの裂地に似ている他, 組織技法については特に目新しいものはない。

織 組 織: 綴織

原 糸: 毛

使用番手: 経糸 1 / 30 × 2 片

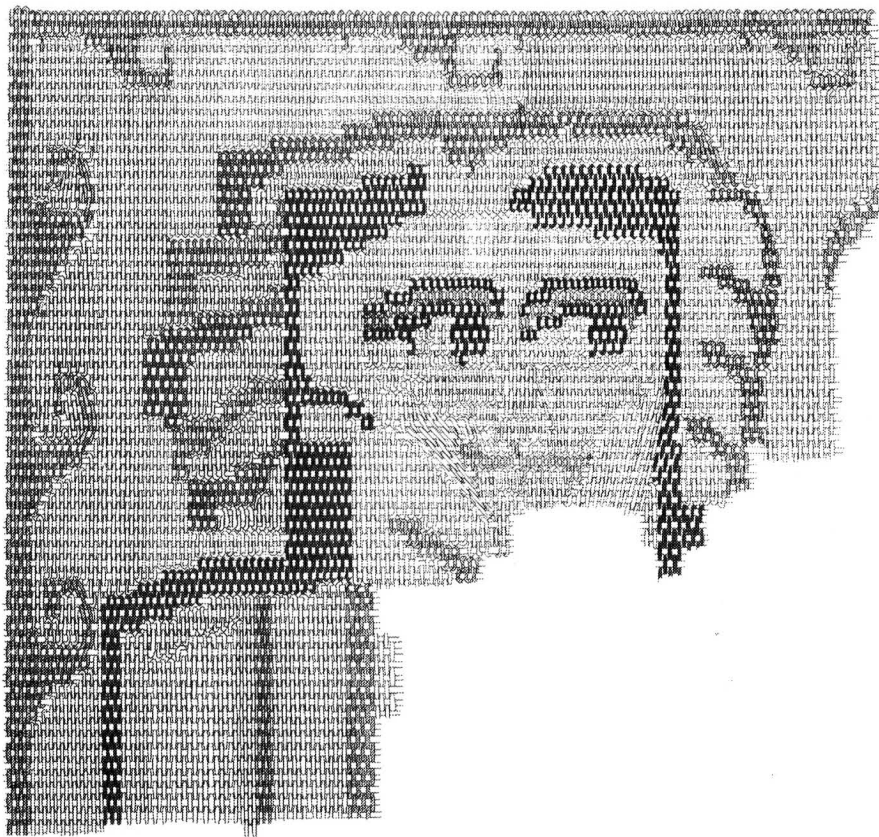
緯糸 1 / 20, 1 / 10

密 度: 12×42本 / cm

染 料: 酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN

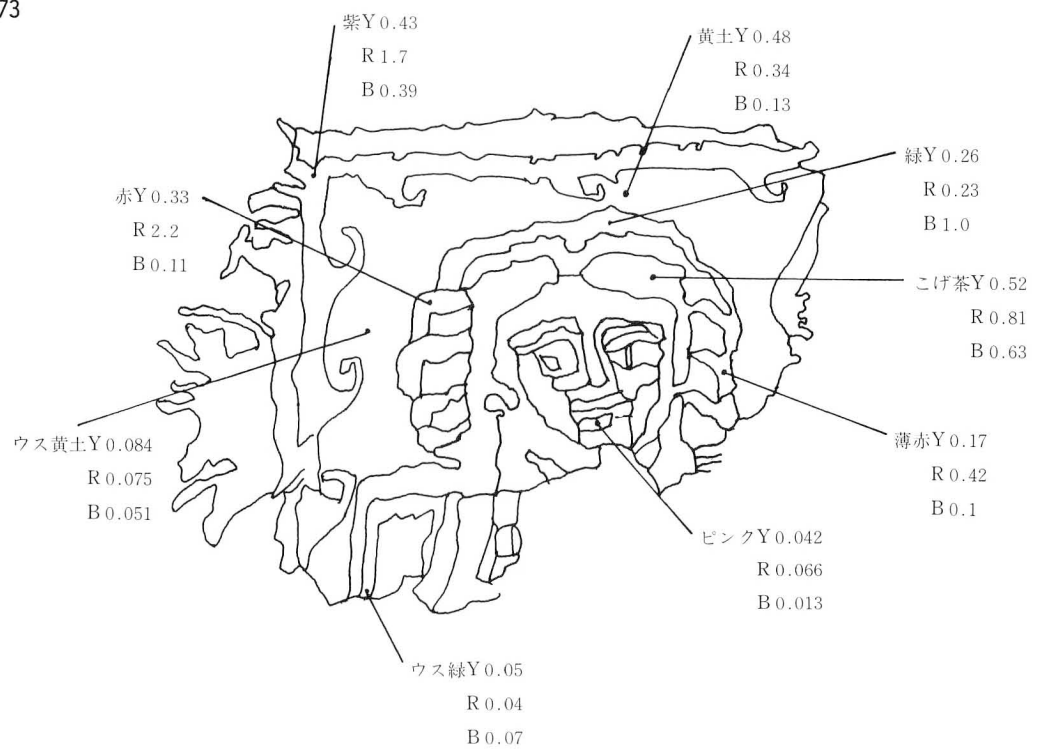


図IV-11 組織要領図, No.173

図Ⅳ—12 完成品写真, No.173



図Ⅳ—13 No. 173



5. 裂地No.180(C-54-1-a)(図Ⅳ-14, 15, 16)

織組織は綴織で特に変わったテクニックを使用しているわけではないが、この裂地の特徴は流し織りを、ふんだんに使用している事と、ブルー系の糸とブラウン系の糸の番手に差をつけ緯糸の密度に変化をもたせている事である。別表の裂地比較表及裂地写真を参照すれば、ほぼこれら (No.179, No.181, No.183, No.184, No.182) 6 点の裂地は同一又は同じ系統に類することが推測される。しかし現在迄のところ、他に立証のデータがない事などから推測の域を出ない。

複製品作製仕様

織組織：綴織

密度：ブルー系10×28本/cm

原糸：毛

ブラウン系10×32本/cm

使用番手：経糸2/10片

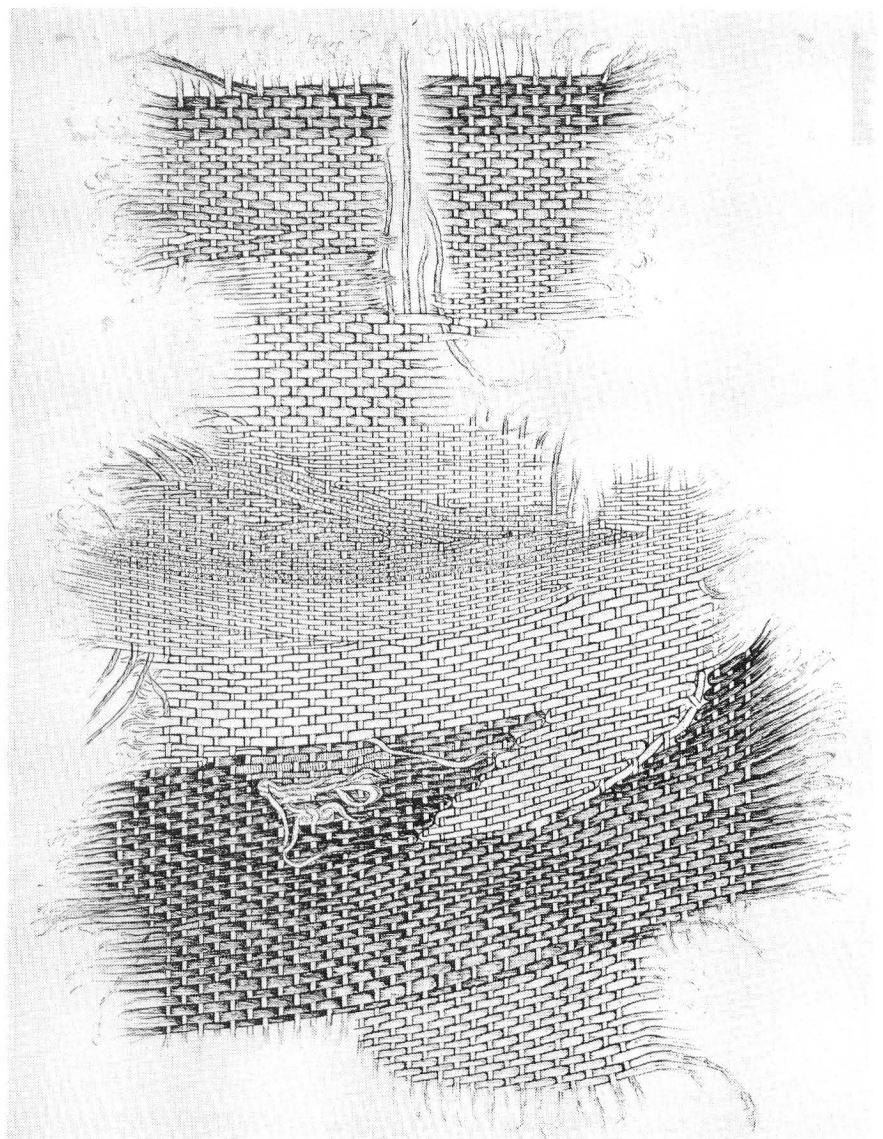
染料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

緯糸1/10, 1/20

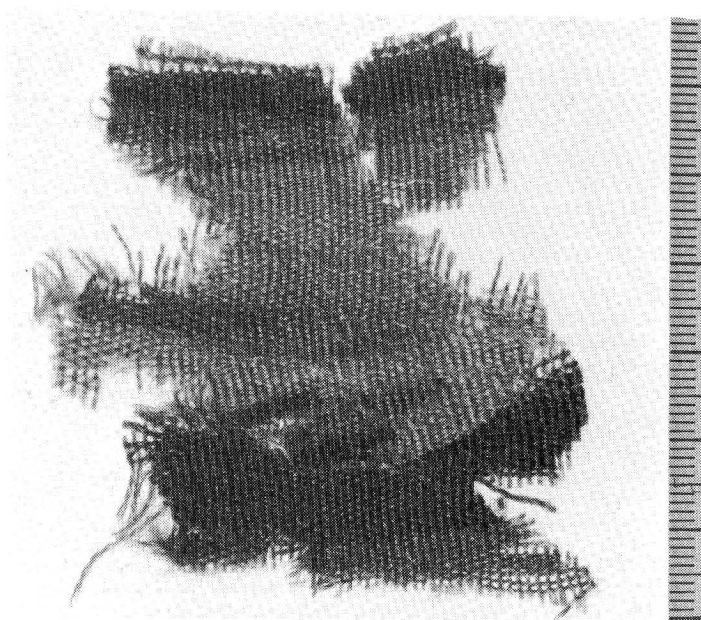
SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN

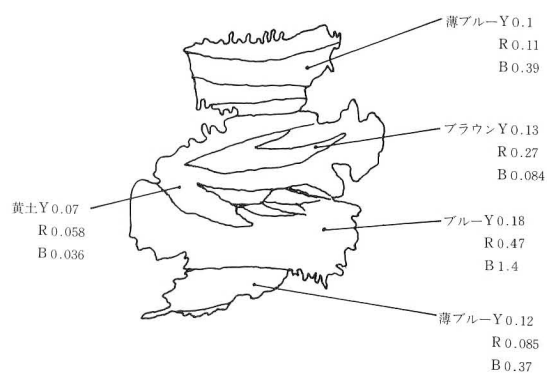
図Ⅳ-14 組織要領図, No.180



図Ⅳ—15 完成品写真, No.180



図Ⅳ—16, No.180



裂地比較表

データは染織遺物集成による

裂地番号	179	180	181	183	184	182
出土地点	F-4, III-T	F-4, III-T	F-4, III-T	F-4	F-4	F-4
採集番号	C-53-1	C-54-1-a	C-54-1-b	C-56-a	C-56-b	C-55
	綴	綴	綴	綴	綴	綴
素材(経)	毛	毛	毛	毛	毛	毛
(緯)	毛	毛	毛	毛	毛	毛
撚(経)	S	S	S	S	S	S
(緯)	Z	Z	Z	Z	Z	Z
糸の直経(経)	0.44	0.36	0.89	0.56	0.40	0.53
(緯)	0.62, 0.53 0.56, 0.44	0.58, 0.67 0.47	0.69, 0.44 0.54, 0.46	0.45, 0.40 0.48	0.51, 0.45	0.70, 0.26
密度(経)	11	10	10	5	11	10
(緯)	24.31	32.28	30.40	28.36	24	26

6. 裂地No.170(C-05-V-3)(図Ⅳ-17, 18, AL-TAR, I, Fig. 2)

この裂地の組織は綴織であるが特徴としては経糸を2本引き揃えて使用していると共に花卉と思われる円形の図柄の上下のボーダーをオレンジ色と茶色の緯糸を交互に用いることによって(ヤスラ織)組織の変化を与えずに柄を出す技法が用いられている事が特筆すべきことであろう。

織 組 織：綴織

原 糸：毛

使用番手：経糸 1 / 24 × 2 片

緯糸 1 / 20

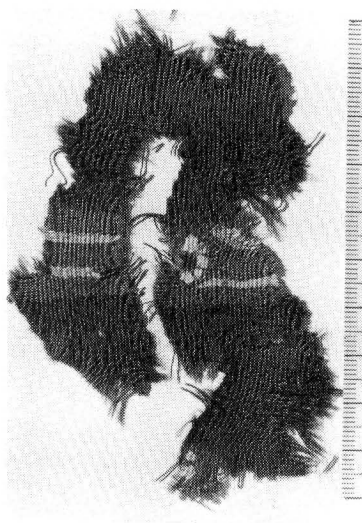
密 度：24×49本 / cm (2本引き揃え)

染 料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

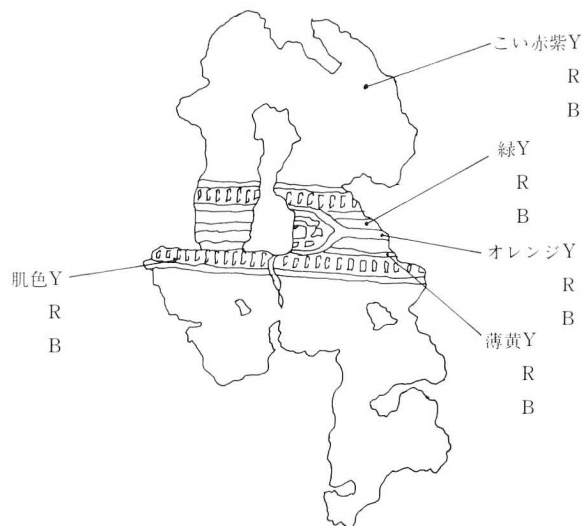
SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN

図Ⅳ-17 完成品写真, No.170



図Ⅳ-18 No.170



7. 裂地No.190(C-38-12-a)(図Ⅳ-19, 20)

この組織は他の裂地にも多々みられる綴織と平織の併用である。今日の織機は経糸の開口装置として綜統を用いる為に、このような併用組織を用いる事はほとんどないが、この裂地を見る限り当時は綜統なしの手すくいにて織っていたので、このように自由な織り方が可能になったと思われる。しかしH型文様などのように柄の部分綴織りで、その他を平織りという区分は理解出来るが、この裂地のように同じ無地でありながら組織を変えることはテクスチャーの変化を求める目的以外は今後の研究がまたれる。

織組織：平織り，綴織り

密度：平織り14×15本/cm

原 糸：毛

綴織り12×40本/cm

使用番手：経糸1/24×2片

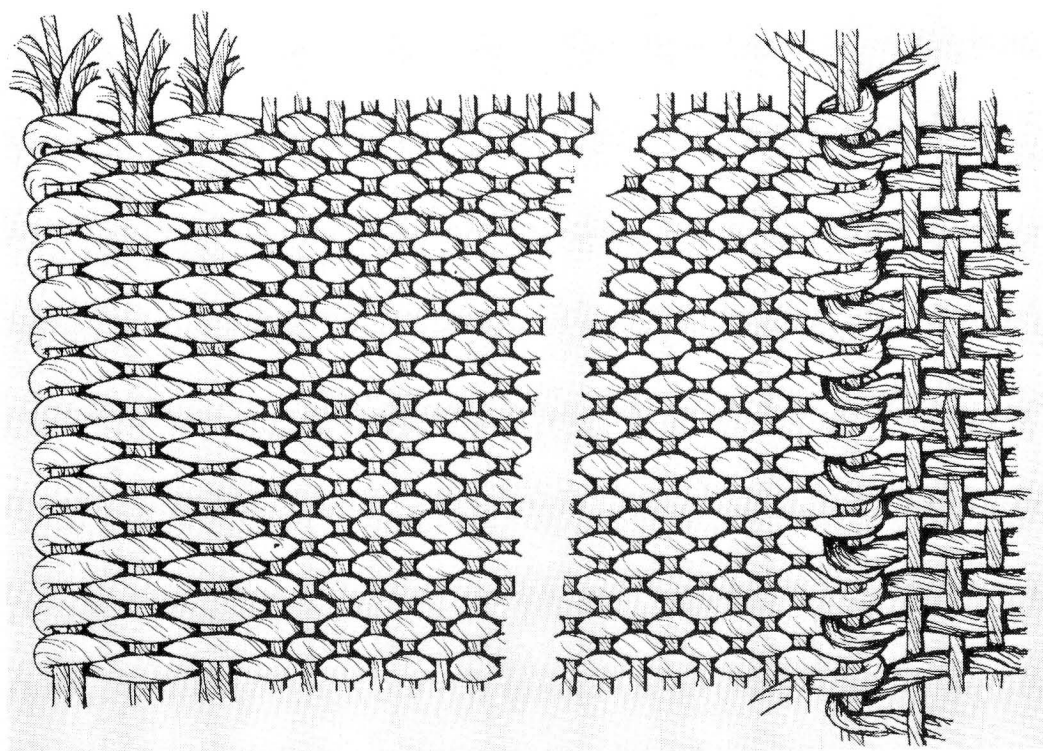
染料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

緯糸1/20, 1/10

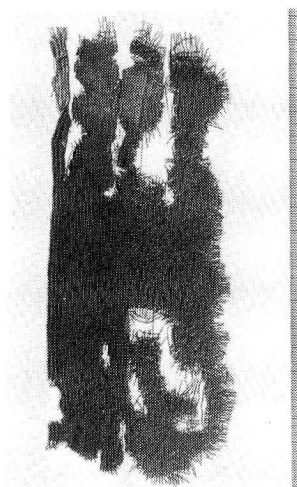
SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN

図Ⅳ-19
組織要領図，
No.190



図Ⅳ-20 完成品写真，No.190



8. 裂地No.226(C-05) (図IV-21, 22, 23)

この組織は図のような要領で山形の図柄をループ織りにて形づくり他の色糸にて逆のループ織りで埋め織りをし、このループを2本引き揃えの緯糸で平織りにて止めるという裂地である。

この裂地の用途は残念ながら小断片の為判断はつかないが、おそらく敷物の類であつただろうと予想できる。

織 組 織：ループ織

原 糸：毛

使用番手：経糸 1 / 10 × 2

緯糸 1 / 12 × 2片, 1 / 7 × 4片

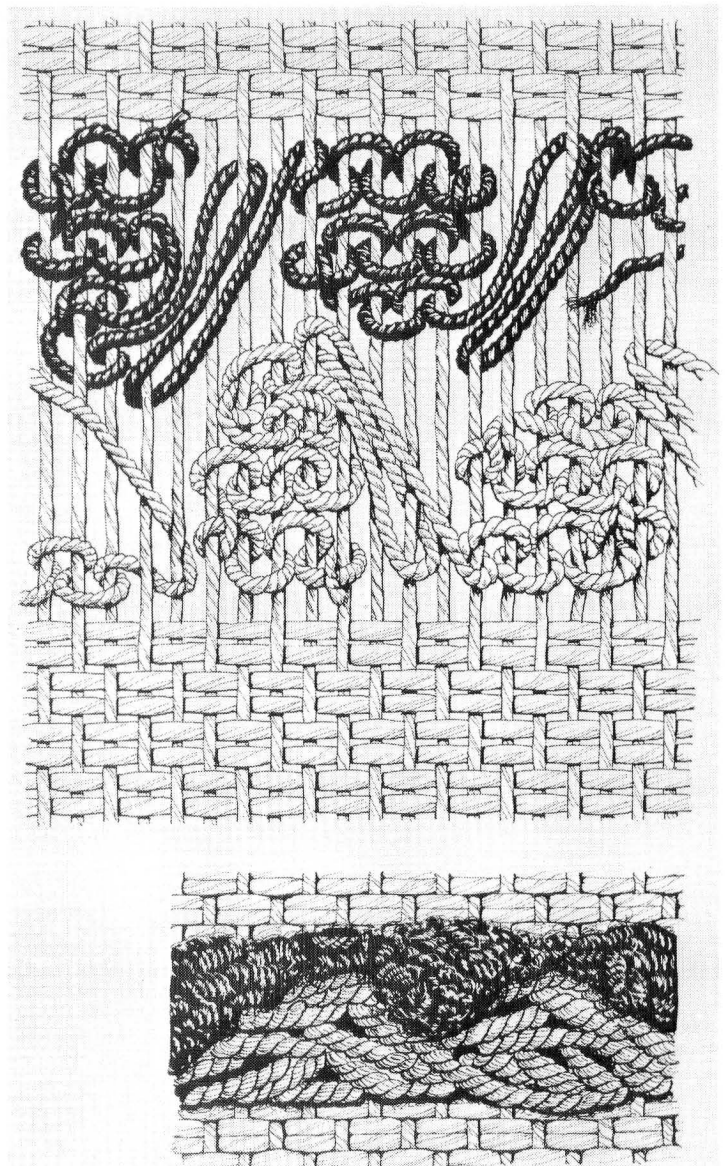
密 度：8 × 16本 / cm (2本引き揃え)

染 料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN

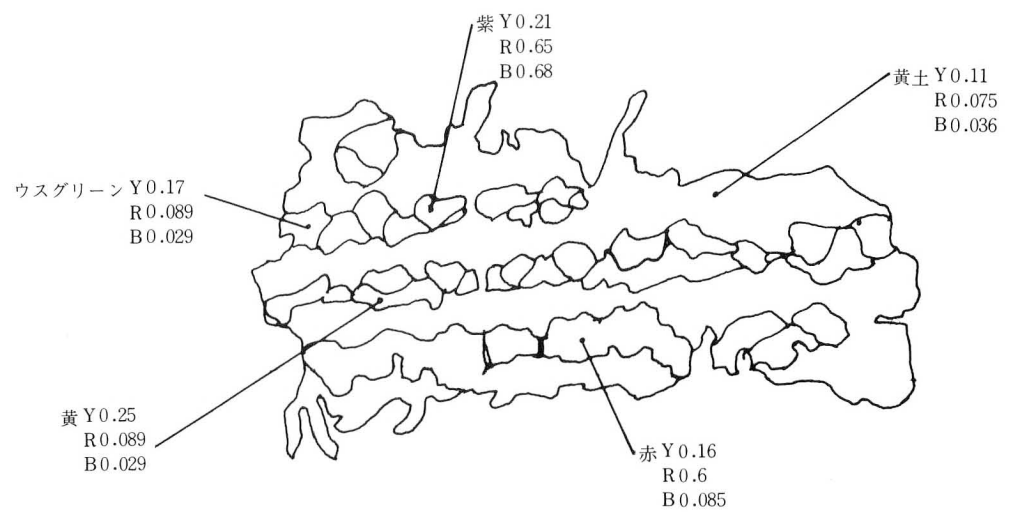
図IV-21 組織要領図, No.226



図Ⅳ-22 完成品写真,
No.226



図Ⅳ-23 No.226



9. 裂地No.66 (C-301-1-a) (図IV-24, 25, 26, 27)

この組織は普通の綴織である。そして特徴は段ぼかしである。今日綴は先染めで、異なった色糸を、`合せ、てその合せ方と織り込み方で、柄のぼかし即ちグラデーションをつくる。

しかしこの裂地の場合は原毛の状態で染めて、ちがった色の原毛をミックスし、その上で手紡した糸を用いてぼかしを出しているものと思われる。それにしても長年月たった今日、美しい色のグラデーションを見ることが出来るのは織りの技術とともに、染色技術のたしかさをものがたるものである。

織 組 織：綴織

原 糸：毛

使用番手：経糸 2 / 10

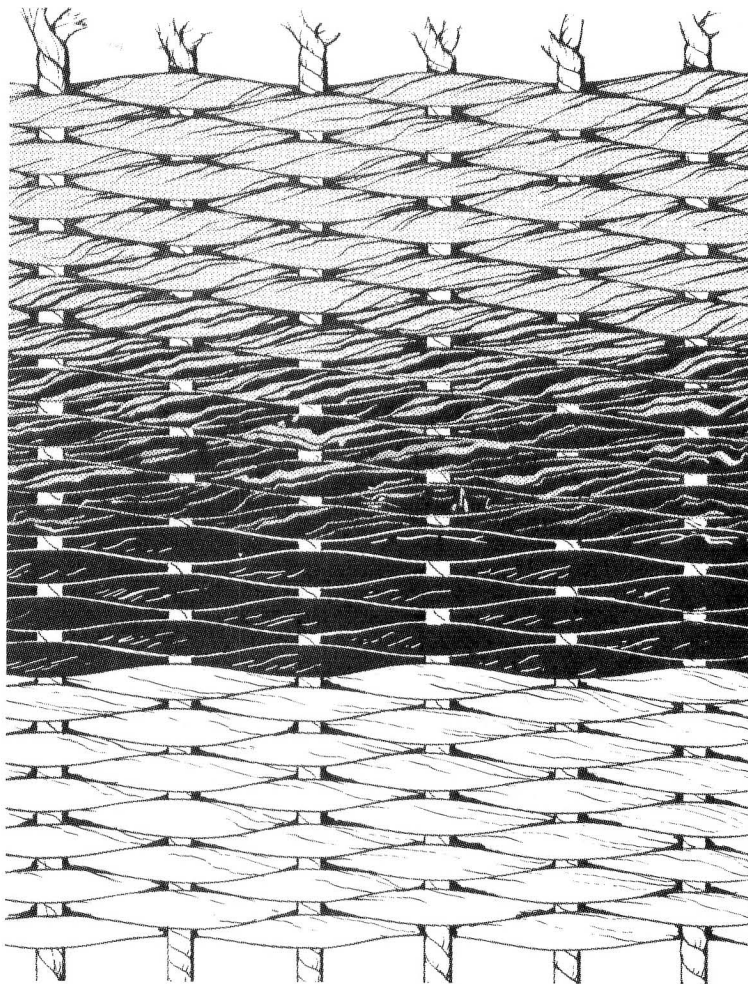
緯糸 1 / 20他

密 度：9×59本 / cm

染 料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW RG

SUPRACEN RED B

SUPRACEN BLUE BN



図IV-24 組織要領図, No.66

11. 裂地No.188(C-38-5-1-b)(図Ⅳ-32, 33, 34, 図版 V)

この裂はぶどう文と称している文様と波型文との組みあわせで構成されている。アルタール出土品の多くは小断片であり、文様や裂の用途研究に困難があるが、この裂は全組織に綴織技法を用いている他、No.66(C-301-1-a)と同じ「ボカシ」の技法を文様帯をはさんでふんだんに使用している大布で、研究手順上まず手がけなければならない布の一つである。

なおこの裂地の変色は著しく、肉眼では汚れがはげしく、文様の形と色、ボカシの変化と生地との区別がつきにくい状況であったので、赤外線写真で撮影する事により図Ⅳ-32のように判別可能になった。この時は肉眼で判断して仮にこのように配置した。この裂は中央部に縫合された経糸始末の耳があり(図Ⅳ-32中央左で)上下はつながっている。つまり図で上下に見えるものは本来左右としてあったものである。そこで経糸始末耳を起点として、つながっているボカシと文様帯を基準に、はなれている断片も同順になるように配置してみた。

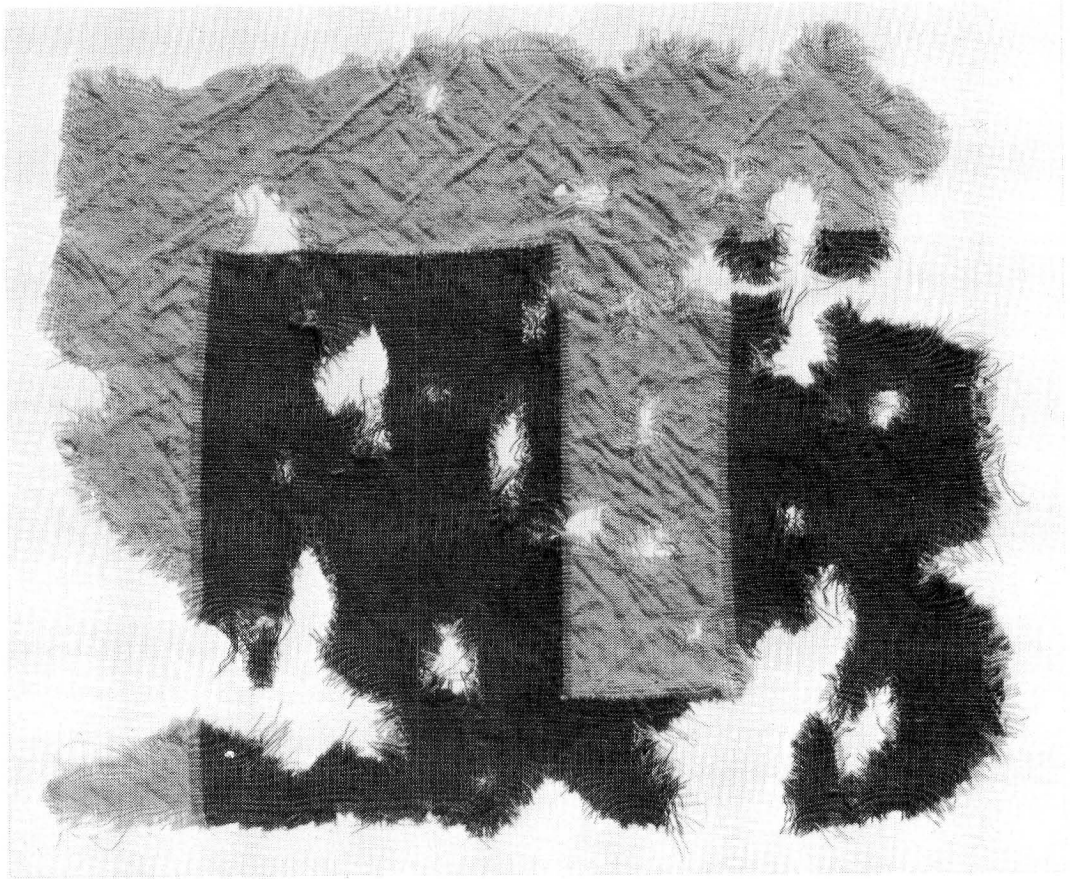
この赤外線写真をベースにスケッチしたのが図Ⅳ-33である。次に現物と照合しながら図Ⅳ-34を作製した。濃く描いた部分は現物を示す。

経糸始末耳から図Ⅳ-33, 34のように波頭文帯に番号をつける。上半左で第5番帯までは裂が連続しているので、その分は確実に図のように復原できる。第6～8番帯の文様帯は下の第5番帯が上の第5番帯に共通するものとかんがえて、第8番帯までを図のように復原できる。

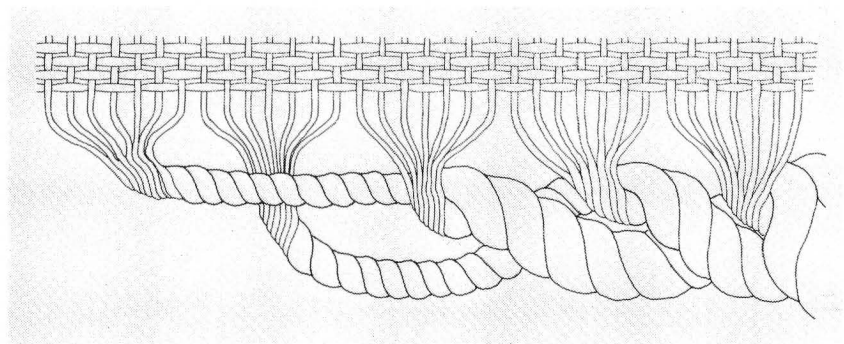
さらに図Ⅳ-33下半中央(A印)に見えるようにあきらかに他より小型で色も異なるブドウの実がある。従って、第2～3番帯、第6～7番帯の他に少くとももう1本のブドウ文様帯が考えられるが、文様単位も位置も定めることはできないので、今回は図示しない。

以上は文様の規則性のみを考慮して検討したものであり、組織や技法などをあわせて今後検討しなければならない。

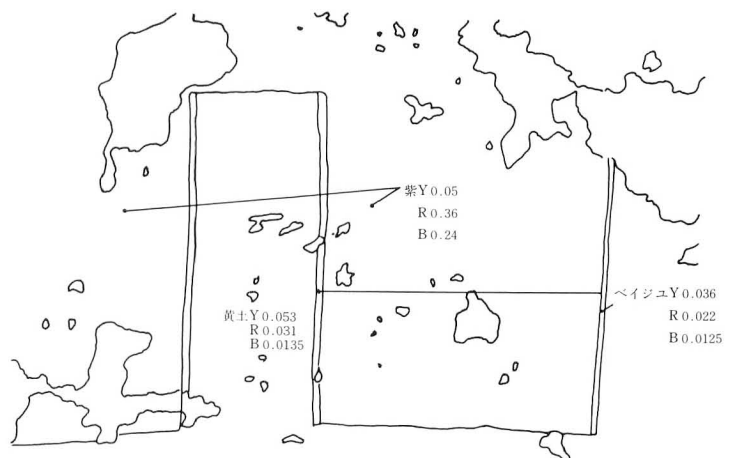
図Ⅳ—29
完成品写真
No.178



図Ⅳ—30 経糸の始末要領図
No.178



図Ⅳ—31 No.178



10. 裂地No.178(F 4-Ⅲ-T, C-31)(図Ⅳ-28, 29, 30, 31)

今回作製したもののうち他は小断片ばかりで、組織や技法はさまざまで、それはそれなりに興味のないものであるが、どんな用途の織物であったかは、全くたしかめようもないものばかりである。しかしこのH型文は組織、技法の上では平織地に綴織で文様を織り出している。用途として今後の研究をまたねばならぬがおそらく貫頭衣でないかとも察せられる。

尚、経糸の仕末については使用した織機が判らぬため、織り始めであるか、終りであるかは確かでない。

織 組 織：綴織，平織

原 糸：毛

使用番手：平織り 経糸 1 / 21 × 2 片

緯糸 2 / 20 片

綴織り 経糸 1 / 24 × 2 片 (2 本引き揃え)

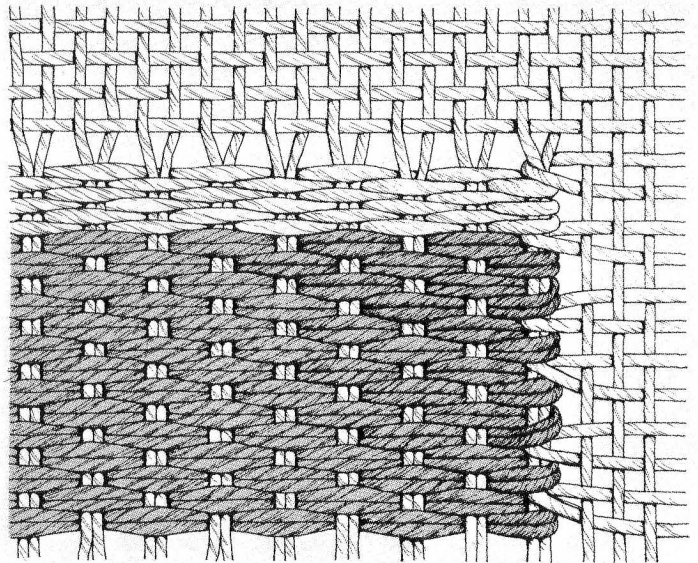
緯糸 1 / 30 × 2 片, 1 / 10

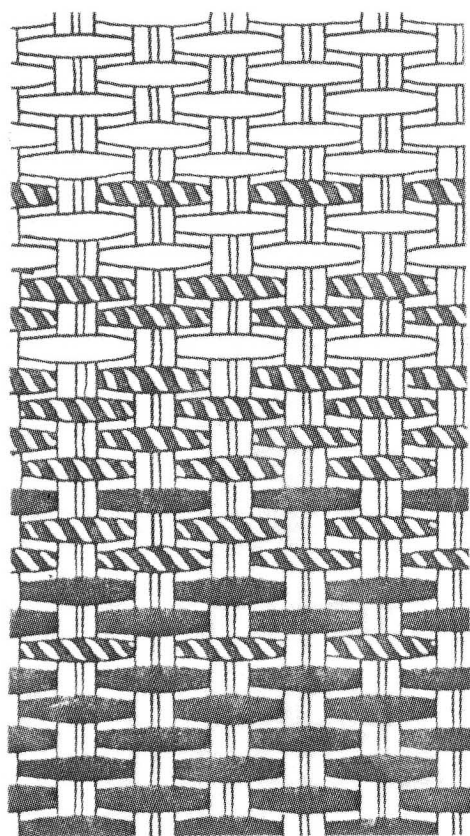
染 料：酸性染料 SUPRACEN YELLOW GR

SUPRACEN RED B

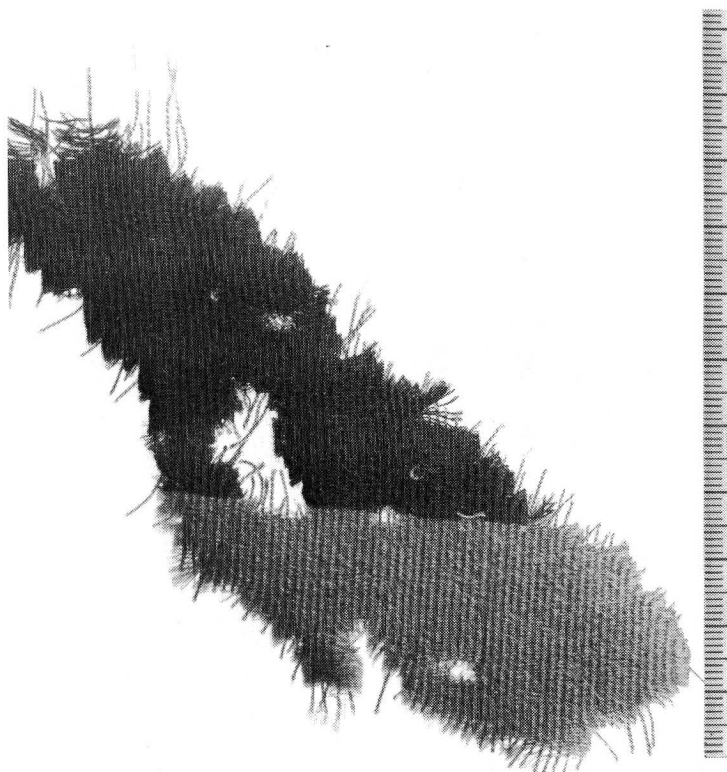
SUPRACEN BLUE BN

図Ⅳ-28 組織要領図, No.178



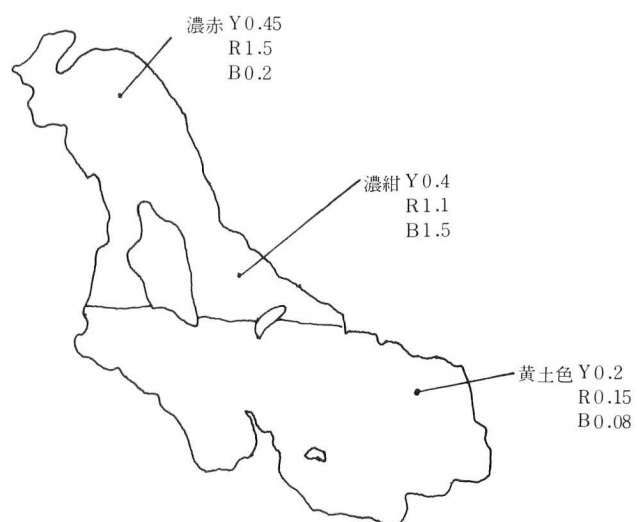


図Ⅳ-25 今日の段ボカシ組織要領図



図Ⅳ-26 完成品写真, No.66

図Ⅳ-27 No.66



実際の織物に表わされた例は、アゼルバイジャンのゲルミ、タペ・ワラレ出土のパルティア時代（1～2世紀）の毛織物に見られ、縁取り内部に区画された矩形の中に置かれている。

No.253は鎖縫いの刺繍で、𐎠型の連続文と考えられるが、断片のためその連続構成の仕方は不明である。一列だけでなく別の列も並行しているらしい。𐎠型の連続文すなわち𐎠型メアンダー文は、すでにエジプト、ギリシアで出現を見た後、²⁶⁾西アジアではアンティオキア（図Ⅲ-23）、ハトラ、クーイ・フワージャ²⁷⁾（1世紀）等数多く例があり、ローラン出土の綴織りの毛織物の文様にも表現されている。²⁸⁾これらの例はいずれも𐎠字ともう一つのモチーフを交互に配し連続してゆくものであるが、アル・タールの場合𐎠字以外のモチーフの部分は断片のため見られない。

No.172は綴織りの小断片で、直角に屈折する線が連続するメアンダー文と思われるが、如何なる連続文であるかは不明である。メアンダー文はギリシアの幾何学様式陶器の主文様であるが、以後広範囲に流布した文様である。²⁹⁾

小型マーク No.185は黄茶地に暗赤色の綴織りでモチーフの角部分を表しているが、何のモチーフであったか判然としない。大きなモチーフが続く可能性もある。

No.202, No.210は織端近くに先の尖った線の途中から斜め方向に短線が延びている。着衣者の名前を示すマークのようなものであったかも知れない。

おわりに

以上作例の比較により、周辺諸文化との関連が具体的に指摘された。パルミラ、ドゥラ・エウロポスとは量し帯、横縞文、H・L型文等とくに毛織物の幾何学系の文様において密接な関係がある。しかしこれらの両地域で出土した絹織物はアル・タールで発見されていない。それはアル・タールの地理的位置が、古代の主要交易品であった絹織物が運搬された西アジアのシルク・ロードの幹線からはずれており、アル・タールの遺跡はパルミラやドゥラ・エウロポスの如く繁栄した隊商都市でなかったためと思われる。

人物文織物はメソポタミアのみならず西アジアで出土した最古の例である。その図像、表現様式は、プレ・コプトやローランの織物と類似するばかりでなく、アンティオキアのモザイク等とも関連するグレコ・ローマン系統のものと、それらに土着的要素が加えられ変容したメソポタミア産の系統のものと二系統が並存している。

以上からアル・タール文化はアンティオキア等のグレコ・ローマン系統が基調をなしているが、パルミラ、ドゥラ・エウロポスなどのパルティア系統や土着的要素が加わり複合的様相を呈している。おそらくアル・タールの地理的環境は閉鎖的なものでなく、アンティオキアへの経路、パルミラやドゥラ・エウロポスへの経路等が開通しそれらの文化を摂取するに足る交通上の要衝であったものと推定される。また土着的要素は土民的遊牧生活ではない定住生活が背後に存在することを窺わせ、貴族階級が存在も織物に表わされた人物文などから想定される。

アル・タールの遺跡は放射性炭素の測定により紀元前後の数世紀に入るものと推定されているが、染織品の文様の比較例の年代からとくに紀元後に重心が置かれると思われる。

註

- 1) パルミラはシリアの古代隊商都市で、地中海沿岸とユーフラテス河流域をつなぐ隊商路の中間に位置する。紀元1～3世紀にローマ帝国属領の商業中継地として繁栄するが、272年ローマ軍によって攻略され滅亡する。郊外の墓域にある塔墓より織物が出土した。パルミラの織物は、ジャンブリクの塔墓(A.D.83年創建)、エラベルの塔墓(A.D.103年創建)、第46号塔墓(A.D.1世紀創建)より出土しており、年代は紀元1～3世紀のものと推定されている。
R. Pfister, *Textiles de Palmyre*, Paris, 1934; *Nouveaux Textiles de Palmyre*, Paris, 1937; *Textiles de Palmyre* III, Paris, 1940
- 2) ドゥラ・エウロポスはシリアの古代隊商路がユーフラテス河沿いの道と合流するところに位置する都市遺跡で、紀元前後の約600年間軍事上の要地としてまた商業都市として繁栄した。前300年頃に建設されたセレウコス朝下のヘレニズム都市であったが、前2世紀頃パルティアの勢力下となった。紀元165年以来ローマが支配したが、256年ササン軍によって落城した。ドゥラ・エウロポスから出土した織物は、大部分都市の城壁と塔より発見されたもので、年代的には3世紀頃のものと推定されている。毛織物が280点近くあり、絹も2点出土している。
R. Pfister & L. Bellinger, *The Excavations at Dura-Europos, Final Report IV, Part II, The Textiles*, New Haven, 1945
- 3) ゼノビア(現名ハラビエ)は、シリアのユーフラテス沿岸の都市ティル・エズ・ゾルより65km上流に位置する。地中海及び北方と、メソポタミア及びペルシア湾を結ぶ交通の要地である。紀元2～3世紀にはパルミラと密接な関係があり、6世紀にはビザンチンのユスティニアヌス帝(在位527—565)に支配された。塔墓より発見された織物は、フィステルによれば6世紀後半から7世紀初めのものである。
R. Pfister, *Textiles de Halabiyeh*, Paris, 1951
- 4) ローランはタクラマカン砂漠の東端、ロプ・ノール周辺に繁栄した古代王国でクロライナと呼ばれた。前2世紀から存在が知られ5世紀まで繁栄した。L.C.古墓よりヘレニズム様式を示す毛織物が多数出土している。
A. Stein, *Innermost Asia*, Oxford, 1928, pp.231～246
- 5) 藤井秀夫編 Al-Tar, I. 1976, pp.9～10
藤井秀夫「アル・タール遺跡の発掘」『古代イラクの発掘』国際交流基金, 1977
同上「アル・タール文化及びその文化圏に関する研究」『考古学ジャーナル』127号, 1976
同上「AL-TAR, Excavations in 1973」*Sumer* XXXII, 1977
同上「Al-Tar Caves, Hill A Excavations in 1972～1973」*Sumer* XXX, 1974
同上「Al-Tar Caves, Hill A Excavations in 1971」*Sumer* XXIX, 1973
- 6) L. Kybalová, *Les tissus coptes*, Paris, 1967, pp.34～36
- 7) L. Kybalová, op. cit., pls.1～8
- 8) L. Kybalová, op. cit., pls.1～8. 図版解説
- 9) D. Levi, *Antioch Mosaic Pavements*, Princeton, 1947. pl. Xa, XVIIIa～d, XLIIIb, XLVIe
- 10) 他にもR. Girshman, 岡谷公二訳『古代イランの美術 II』新潮社, 1966, figs. 180・181
- 11) 他にもD. Levi, op. cit., pl. IXd
- 12) A. Stein, *Innermost Asia*, Oxford, p.231 pl. XXX 人物の縦方向は緯糸方向と一致する
- 13) 他にもR. Girshman, op. cit., figs. 180・183
- 14) 平織りと畝織りが併用されている場合、畝織りは薄茶、黄茶などが用いられており地の部分と思われる。例えばNo.141。

- 15) R. Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pp.23～26, Nos. 39～128.
- 16) R. Pfister, *Textiles de Palmyre*, pls. II～IV, T.10・13, L.12; *Nouveaux textiles de Palmyre*, pls. IV
V, T.68, L.30・36・41
- 17) R. Pfister, *Textiles de Halabiyeh*, Nos.40～44.
- 18) R. Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pp.23～27.
- 19) R. Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pp.10～12, figs. 3・4
- 20) H型文はドウラ・エウロポスのNo.18・19, パルミラのL.92, L型文はドウラ・エウロポスのNo.23・24・25
など。
- 21) パルミラのL.110も織耳に接する矩形文で, フィステルはマントの一部と推定している。R. Pfister, *Textils de
Palmyre* III, p.30
- 22) E. R. Goodenough, *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, New York, 1964, Vols. 9～11;
N. Kuniya, "The Gammadiâe, the Swastike and the Divine Fluid," *Orient*, Vol.4, 1967, pp.17～336
国谷誠朗「図像象徴としての万字——古代オリエントにおける図像象徴解読への試論」『オリエント学論集』日本オリ
エント学会創立二十五周年記念, 1979, pp.201～218
- 23) 国谷誠朗 op. cit., 挿図1
- 24) 国谷誠朗 op. cit., 挿図4
- 25) 他にもN. Kuniya, op. cit., figs.17・18
- 26) 水田徹「ギリシア幾何学様式の美術」『美術史』81号, 1971, p.23, 挿図15・16
- 27) R. Girshman, op. cit., pl.54
- 28) A. Stein, *Innermost Asia*, pl. XXXI, L.C.V.ol.
- 29) 水田徹 op. cit.

図出典 (図の矢印は経糸方向を示す。指示のないものは図方向と一致する)

- Ⅲ-1 コプトのチュニクの装飾部分
Kybalová, *Les Tissus Coptes*, p.35
- Ⅲ-2 ナイル河の擬人像織物コプト, 3～4世紀
Kybalová, op. cit., pl.2
- Ⅲ-3 人物胸像モザイク, アンティオキア
Levi, *Antioch Mosaic Pavements*, pl. CXLIX
- Ⅲ-4 鋸歯文と波頭文縁飾りモザイク, アンティオキア
Levi, op. cit., pl. VIIb
- Ⅲ-5 女性小像, バビロニア地方
D. Schlumberger, *L'Orient Hellenisé*, Paris, 1965, p.148
- Ⅲ-6 デイオニッソス像モザイク, アンティオキア
Levi, op. cit., pl. CLXII
- Ⅲ-7 デイオニッソス像織物, コプト, 3～4世紀

- W. F. Volbach, *Early Decorative Textiles*, London, 1969. pl. 7
- Ⅲ-8 頭部モザイク, ビシャーブール, 3世紀後半
Girshman 『古代イランの美術 Ⅱ』 fig. 183
- Ⅲ-9 女性頭部織物, コプト, 4世紀
Kybalové, op. cit., pl. 5
- Ⅲ-10 女性像壁画, ミーラン, 3世紀
- Ⅲ-11 ヘルメス像織物, ローラン, 3世紀
Stein, *Innermost Asia*, pl. XXX
- Ⅲ-12 女性像モザイク, ビシャーブール, 3世紀後半
Girshman, op. cit., fig. 181
- Ⅲ-13 波頭文縁飾り, ドゥラ・エウロポス, No. 128
Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pl. Ⅲ
- Ⅲ-14 波頭文縁飾り, パルミラ, L. 126
Pfister, *Textiles de Palmyre* Ⅲ, fig. 13
- Ⅲ-15 葡萄唐草文浮彫, パルミラ
Schlumberger, op. cit., p. 89
- Ⅲ-16 葡萄唐草文浮彫, パルミラ
Schlumberger, op. cit., fig. 34
- Ⅲ-17 人物像浮彫, パルミラ
Girshman, op. cit., fig. 91
- Ⅲ-18 人物像, ハトラ
Schlumberger, op. cit., 追加図版21a
- Ⅲ-19 帯状装飾, パルミラ, L. 127
Pfister, *Textiles de Palmyre* Ⅲ, fig. 14
- Ⅲ-20 植物文装飾, パルミラ, L. 124
Pfister, *Textiles de Palmyre* Ⅲ, pl. Ⅶ
- Ⅲ-21 植物文装飾, パルミラ, L. 125
Pfister, *Textiles de Palmyre* Ⅲ, fig. 12
- Ⅲ-22 ハート形花文, ドゥラ・エウロポス, No. 140
Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pl. XXI
- Ⅲ-23 植物文装飾, パルミラ, L. 121
Pfister, *Textiles de Palmyre* Ⅲ, pl. Ⅶ
- Ⅲ-24 波頭文と暈し帯の縞文, ドゥラ・エウロポス, No. 126
Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pl. XVII
- Ⅲ-25 横縞文, ドゥラ・エウロポス, No. 110
Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pl. Ⅱ
- Ⅲ-26 格子文, パルミラ, T. 69

Pfister, *Nouveaux Textiles de Palmyre*, pl. IV

Ⅲ - 27 横縞文, ドゥラ・エウロポス, No. 231

Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pls. IV・XXIII

Ⅲ - 28 H型文, ドゥラ・エウロポス壁画

E. R. Goodenough, *Jewish Symbols in the Greco-Roman Period*, Vol. 11, pl. VI

Ⅲ - 29 H型文, ドゥラ・エウロポス, No. 18

Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, pl. X

Ⅲ - 30 H・L型文, ドゥラ・エウロポスの織物

Pfister, *The Excavations at Dura-Europos*, fig. I

Ⅲ - 31 卍型文, 舗床モザイク, ローマ, 4世紀末

A. Grabar, 辻訳『キリスト教美術の誕生』新潮社, 1967, pl. 159

Ⅲ - 32 メアンダー文モザイク, アンティオキア

Levi, op. cit., pl. I